

# さまざまな色彩を創造

## 有田 陶片物語



わたしたちが目にするやきものの多くは、表面を光沢のある釉が覆っている。「何の汚れが付着しにくいいため、衛生の面でも秀逸だ。」

### 施釉の普及

日本で、この高火度で熔融する釉を人工的に操れるように



さまざまな釉薬の種類。灰釉（左上）、鉄釉（左下）、青磁釉（中上）、辰砂・赤（中下）、瑠璃釉（右）

なるのは、約1200年前の奈良時代のことである。だが、ごく一部の高級品のみに施される極めて希少価値の高いものであったため、実際には、その後400年ほどの間、無釉のやきもの時代が続いたのだ。

現代のように施釉が一般化した背景には、実は、唐津焼や伊万里焼の誕生が大きく関わっている。大陸の進んだ技術を基盤とする肥前の窯業では、当初から、施釉はごく当然のことだったからだ。それらが大量に全国へと流通しはじめたのだから、他の生産地にとってはまさに脅威である。こうして各地の生産地が追従することにより、急速に施釉が普及したのだ。

しかも近世窯業は、施釉技法の中に新たな付加価値もはぐんだ。従来の白と黒のモノトーンの釉の段階から脱し、自在にやきものを彩るさまざまな色調の釉を創造した。これにより、釉の選択によって、多様な種類のやきものを作り分ける方法が確立したのである。（有田町教育委員 会 学 芸 員・村 上 伸 之）

絵唐津皿（左）と染付皿（右）—有田・天神森窯跡



要素はさまざまである。だが、最もそれに貢献しているのは、実は、器面に施された文様、特に筆による描画である。種類の限られる釉薬や機能面の制約を受ける器形と異なり、筆による描画との出合いは、やきものに新たな飛躍をもたらした。同じ題材でも表現方法を変えることで、また、個々の文様の組み合わせなどによって、無限大の種類を作り出せる可能性を加えたからだ。

だが、この筆による描法の成立、1万年以上の日本のやきもの歴史上では意外に新しい。今から400年と少し、1590年代ごろのことにすぎないから

## 文 様

## 有田 陶片物語



時代の要求に合わせ、刻々とその姿を変える有田焼。約400年の歴史の中では、いったいどれほどの

### 器を印象付ける主役

種類や器形、釉種をはじめ、数万種類はくだらない。器種の生成にかかわる

せなどによっても、無限大の種類を作り出せる可能性を加えたからだ。

だが、この筆による描法の成立、1万年以上の日本のやきもの歴史上では意外に新しい。今から400年と少し、1590年代ごろのことにすぎないから

だ。しかも、その普及にお

（有田町教育委員 会 学 芸 員・村 上 伸 之）



有田焼のうさぎ(有田町・楠木谷窯跡、1650年代)

## 人間だと80歳?

有田

# 陶片物語

また新しい年が幕を開けた。子ども  
の頃には、まるで悠久な流れにす  
ら思えた月日の移ろいが、かくも早  
く感じるのはいつのころからか。2  
011年。とりあえず、跳びはねる  
ウサギのように、有田が飛躍する一  
年であることを願いたい。  
今、日本人の平均寿命は80歳を超  
える。では、仮に有田焼の歴史を人

## 磁器創業400年へあと5年

の一生になぞらえたら、いったい何  
歳くらいか。単なる正月気分の戯れ  
言にすぎないが、立ち位置を知って  
おくのも悪くはないだろう。

有田に窯業が成立したのは、江戸  
初期の1600年代。その後、10年  
代の磁器の誕生から90年代までの間  
に、「初期伊万里」「古九谷」「柿  
右衛門」「古伊万里」の順に、各種  
の磁器様式が足早に開発され、成熟  
の時を迎えた。つまり、このおよそ  
100年間を成人への道程とすれ  
ば、5年が人の1年ほどとなる。な  
らば、有田焼の400年は人の80年。  
今のままでは、そう開かれた未来も  
なさそう。

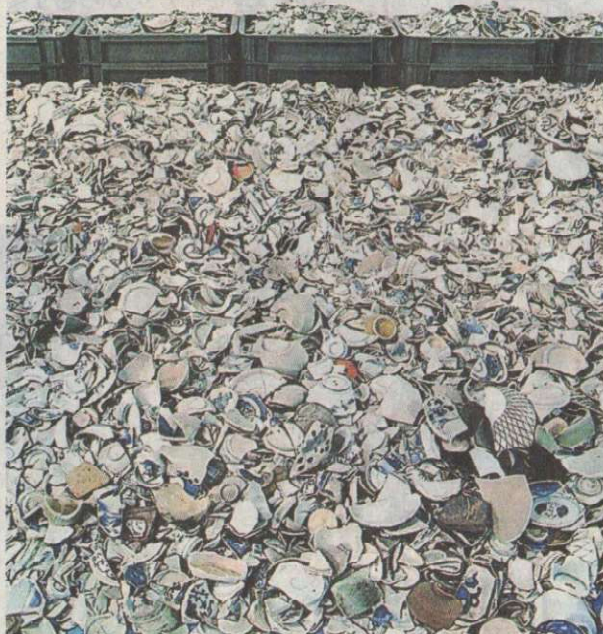
事実、この400年間前後は、日  
本の窯業自体の節目でもある。たと  
えば、5世紀に成立した「須恵器」  
という土器が、陶器に昇華したもの  
そうだし、中世陶器の雄「古瀬戸」  
が、美濃の桃山陶に脱皮するまでの  
期間も例外ではない。

有田は、2016年に磁器創業4  
00年の節目を迎える。あと5年。  
お祭り気分を盛り上げ延命を図るの  
か、有田焼再誕の起点の年とするの  
か。この体感的な年月の経過の早さ  
をおもんばければ、選択までに残り  
れた時は多くはないだろう。

(有田町教育委員会学芸員・村上  
伸之)

H23.1.10 (A)

岡垣浜(福岡県遠賀郡岡垣町)で採集された陶片  
—添田征止氏蔵



## 海揚がり展

有田

# 陶片物語

異常な猛暑もいつのこと  
やら、ようやく樹々の葉も  
色つきはじめ、秋本番とい  
った気配である。有田の紅  
葉の名所と言えば、有田町  
歴史民俗資料館もその一つ  
であるが、同館では、30日

「海に残された有田焼」  
展を開催中である。  
北は北海道から、南は鹿  
児島県まで、全国の海底や  
海岸で発見された680点  
ほどの「海の陶片」により、  
海と陶磁器の交わりを振り  
返る希少な企画である。加  
えて、約3tもの岡垣浜(福  
岡県)採集の陶片の山(?)  
も圧巻である。

## 海と陶磁器の関係探る

積荷などではないか。だが、  
実際にはそれら商品として  
の陶磁器以外にも、他の商  
品の容器や船内の生活用品  
など、また、陸上から廃棄  
されたものなどもある。そ  
こには、江戸初期から明治  
に至る広範な時期の肥前製  
品も含まれ、海を通じた陶  
磁器の動きを現代によみが  
えらせてくれる。  
残念ながら、多くは具体  
的には歴史の記憶には刻ま  
れておら  
ず、誰がな  
ぜそこに残  
したのかは明らかでない。  
ただ、中には坂本竜馬の海  
援隊の用船であった「いろ  
は丸」、戊辰戦争の際に榎  
本武揚らが率いた幕府軍の  
軍艦「開陽丸」の使用品な  
ど、華々しい歴史の表舞台  
に関わったものも含まれ  
る。

秋といえば、食欲の秋も  
捨てがたいが、時にはこう  
した文化や自然にじっくり  
と触れてみるにも、絶好の  
季節ではなからうか。  
(有田町教育委員会学芸  
員・村上伸之)

H22.11.1 (A)



## 有田 陶片物語

冬本番。凍てつく日々が続いている。九州でこれなのだから、北リントされた一枚の写真ではない。雪国の生活など想像すらできない。

### 伝統を守ること

いが、そこはちゃんと各地域で長年にわたり育まれてきた、環境に適応するための生活の知恵があるようだ。ちょっと大げさだが、こんなところにも、やはり現代の生活としてプリントされた一枚の写真ではない。雪国の生活など想像すらできない。

## 新たな価値加え、後世に

ターを切られた、フィルムのコマなのだと感じたりもする。よく、「伝統を守る」と言つ。有田焼もわかりである。長年育まれてきた伝統こそ地域の最も大きな財産の一つであり、それが現代の有田焼が有田焼として存在し得る価値の源泉だからである。だが「守る」とは、単に「大事にする」、「保護する」ということなのか。いや、伝統の陳腐化や形骸化を防ぐためには、逆に、常に時代の変化を敏感にキャッチし、改善に取り組む必要がある。さらに、「攻め」すらも守るための大切な要素であるに違いない。

「初期伊万里様式」「古九谷様式」「柿右衛門様式」「古伊万里様式」など。これらの開発は、有田が仕掛けた伝統の灯を守り、より明るい炎を燃やすため、守るための攻めが具現化されたものにほかならないのだ。

それぞれが、有形・無形の伝統を愚直に身に付け、そこに新たな現代的な付加価値を加えて、育てつつ後世に引き継ぐ。これが「伝統を守る」ということの、本質的(的)な意義なのではなからうか。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H/23.2.7

## 有田 陶片物語

近年、「歴女」なる人々が市民権を得てきているのだそう。現在では、文字通り、広く歴史好きの女性を指すようだ。何をか言わんや、などではある

### 歴史を学ぶ

が、これまで歴史と言えばオタクおやじの道楽的な目で見られていたことからすれば、何とも隔世の感がある。もっとも、



現在も地表面に残る釜の跡。古い窯業地ならでの光景である。有田町・掛の谷窯跡

## まちづくりに生かして

が。ただ、陶磁史に限れば、かねてより興味を持たれる女性の方7も珍しくはなかった。そうした方々の言によれば、陶片が持つのは「魅力」ではなくて、「魔力」なのだそう。口の欠けた瓶に、けがしたわが子のようないとおしさを感じ、文様の欠落部分に、自分の想像力をかき立てられるのだという。

良くも悪くも、有田で生まれ育った方々に、この感覚を理解することは難しいだろう。野山を歩けば陶片に当たるし、川の中でも陶片に当たる。まさに日常の風景なのだから、まさかそこに「魅力」「どこか」「魔力」が隠れているなんて、想像できなくて当然である。実は、歴史に限らず、景観や慣習をはじめ、有田の人が知らない、有田の魅力的な素材は、そこらじゅうに転がっているのだ。

「歴女」に続く、キーワードは「レキッズ」なのだという。有田の次世代を担う子どもたちが、郷土の歴史に興味を持ち、将来の有田のまちづくりに生かしてもらえれば、何ともうれしいことである。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H/23.2.7

有田  
陶片物語

載も12回目、一年の区切りを迎えた。これまでおつき合いただいた読者の皆さまには、深く感謝したい。

特に区切りを意識したわけではないが、時にはちょっと目先を変えて、古陶磁の見分け方の豆知識でも、今回はまず、最初

るが、また、今日に通じるスタイルが確立しておらず、初心者でも識別は容易である。17世紀の間は続いたが、主役の時代は、おおむね1650年代頃までである。

皿などでは、高台の径がかなり小さく、高台の中に銘を入れたり、外面に文様を描くことも

またまだ肌寒い日が続いてい

る。ただ、目に映る風景の中に、次第に春の息吹も感じられるようになった。昨春からのこの連

に成立した磁器様式である。初期伊万里に

ついて触れてみたいと思う。

「初期伊万里」は、1610年代に誕生す

種類としては、染付製品を主体とし、白磁や青磁、鉄釉、鉄絵、瑠璃釉など、色絵製品以外はそろっている。また、ほぼ「初期伊万里」だけに限られる、銅で赤く発色させる辰砂なども作られている。

技術的にはまだまだ未熟さが目立つ「初期伊万里」だが、逆にその純朴さと力強さこそが、人々を魅了する源なのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

純朴さと力強さの魅力



初期伊万里様式「染付兎文中皿」(小溝上窯跡、1620~30年代)

村上伸之

H23. 4

有田  
陶片物語

今年もまた、有田に春の盛りを告げる陶器市の季節がやってきた。108回目の今年も、東日本大震災による自粛ムードもあり客足が懸念されるが、一日も早い被災地の復興のためにも、震災を免れた地域が元気を出す

この「有田焼創業400年」を願いたい。

まず、そのためには、

「有田焼創業400年」を迎える。それに向けた取り組みも具体化しつつあるが、単なる一過性のお祭りにとどまらず、さまざまな面で、新しい有田の起点の年となることを願いたい。

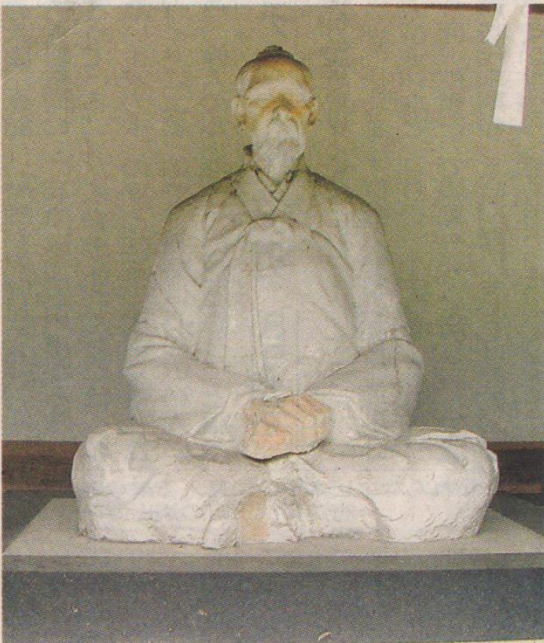
とりあえず答えから記せば、「陶祖李参平(金ケ江三兵衛)が、有田で製陶をはじめた400年の区切りの年」

年」の言葉自体の意味を多くの方が理解し、答えられることが不可欠ではないか。一見簡単そうに思えるが、案外答えに窮する方が多いだろう。直接これについて記したものは見当たらないため、この場を借りて、いくつかの点から触れてみることにしたい。

5.

創業400年

李参平の移住が起点



李参平公の像(有田町・石場神社)

村上伸之

がその定義。400年前の1616年とは、李参平の有田移住の年であり、有田で窯業がはじまってから400年でも、磁器創始から400年でもない。

なぜ、この年を起点とするのか、どんな経緯で李参平が陶祖となったのかなど、次回以降、順次紹介していきたい。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H23. 5

# 古九谷論争②

## 有田陶片物語



前回ちょっと古九谷の生産地論争に触れた。すでに学術的には解決した感のある問題だが、これが、ついに政治の世界に飛び火したのは、ちょっと驚きであった。

昨年7月27日の衆院文部科学委員会

# 政治の世界にも飛び火？

で、元プロレスラーの自民党の馳浩議員が触れたもので、「生産地論争には、まだまだ未決着の部分が多い」のだそう。政治の舞台の出来事にさらさら口を挟むつもりはないが、未決着の根拠の一つが「有田の登り窯の出土陶片の怪しさ」となれば、まんざら対岸の火事というわけにもいかない。

有田説の有力な考古学的根拠は、登り窯では焼成しないはずの四つの色絵片で、しかも、古九谷は磁器なのに、そのうち3点は陶器というところらしい。たしかに、そんな陳腐なものが根拠ならば、有田説も危ういに違いない。実は、掲載した写真が、その疑惑の4点そのものである。昭和47～50年の山辺田窯跡の調査で、有田で最初に出土した色絵片だが、逆に、これをどう見れば陶器となるのか。

また、工房が近接するため、色絵片が出土した有田の登り窯跡は、これまでに13カ所に及ぶ。なにも山辺田窯跡に限らないのだ。もちろん、数量的には上絵付工房関連跡が圧倒しており、古九谷生産期に限っても、すでに100点以上出土している。つまり、いまさらあえて疑惑の4点を持ち出す必然性はないのである。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)



山辺田窯跡出土の色絵片(1640～50年代)

## 有田陶片物語



早いもので、合併による新有田町の誕生からすでに6年あまり。旧両町の主産業であった「食」(農業・西有田町)と「器」(窯業・有田町)の融合

# 「食」と「器」

# 同じ生活圏に育まれ

による魅力的な町づくりが模索されてきたが、「有田焼五膳」をはじめ、徐々にその姿が具現化してきたようである。

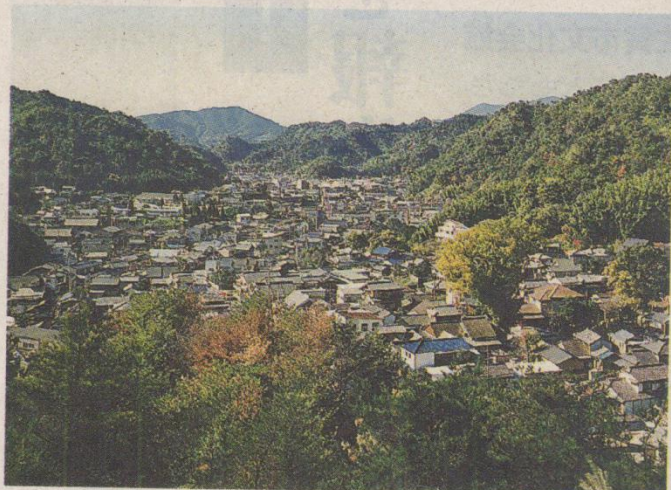
ところで、今では中心となる地域も異なり、一見直接的な接点のなさそうな有田の食と器であるが、実はもともと同じ人々の生活圏の中で育まれ

たものであ。明確に枝分かれしたのは1637年以降のこと。藩により町の西部の窯場が廃止され、管理・保護が容易な東部の山間に窯業地を集約し、

1600年代に成立した有田の窯業は、10年代には磁器を創始し、肥前の窯業の中核地へと歩み始めた。しかし、この初期の窯業は当初から、それを主体とする独自の生活圏域を有していたわけでは

ない。中世に一带を領した有田氏の唐船城を中心とし、その周囲に広がる農業を主体とした生活圏の中で、おそらく半陶半農の状態ではじまったのである。そのため、現在も残る初期の登り窯跡は、その周囲の丘陵を中心に分布している。(この食と器の圏域が、

窯業の専業地として開発された有田町東部の風景





## 有田陶片物語

前回、有田焼創業400年とは「陶祖李參平(金ヶ江三兵衛)が、有田で製陶を始めて400年の区切りの年」という意味であることを示した。

### 創業年の意味

同様な創業記念の事業は、過去に300年に当たると大正5年と、350年の昭和41年にも企画されたが、実は、この二つの年では、創業の意味に少し違いがあった。

創業300年当時は、李參平関連で判明していた具体的な年号は、有田に移住した年のみで

## 陶祖移住か製陶開始か

あった。そのため、その1616年を起点として、300年としたのだ。ところが、昭和10年代以降、急速に1616年を磁器創始の年とする説が普及しはじめた。これにより、創業350年は、「陶祖李參平が磁器を創始して350年」の意味に変わったのである。もっとも、この「1616年磁器創始説」は、単なる文献史料の解釈ミスにすぎない。しかし、根拠の部分はすくなく忘れられ、結論だけが独り歩きしたのである。

残念ながら、今日でも、有田の窯業の成立や磁器創始の具体的な年については謎のままである。よって、創業400年については、当初の300年と同様に、陶祖の有田移住による製陶開始からという意味に捉えるのが妥当である。

つまり、陶祖と連動するため、有田における陶祖の要件とは何か、また、李參平がいつからその陶祖として認識されるようになったのが重要である。次回は、これについて記してみることにする。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H23.5.30

## 古九谷論争

### 有田陶片物語

この連載でも時々名称の登場する磁器に「古九谷」がある。もともと石川県の九谷産と考えられたためこの名称となったが、深い緑や濃い黄、暗い紫など、寒色系の絵具をふんだんに用いた口径30センチを超える重厚な大皿などが最初にイメー

## 生産地めぐり100年続く

「存じの方も多しはすが、現在では、

この「古九谷」、格別なのは何も値段だけではない。名称の誕生からすでに100年近くになるが、ほどなく九谷か有田かで生産地論争が起り、今日まで延々と続けられてきた、格別に数奇な運命をたどった焼き物でもある。

「存じの方も多しはすが、現在では、

ジされるのではないか。バブル期には、億単位で取引されるものもあったらしいので、やはり日本の磁器の中でも格別な存在であることは間違いない。



有田の窯跡などで出土した古九谷様式の色絵陶片

学術的にはすでに有田説は動かない状況で、期待薄とはいえ、九谷産もあったかどうかを残すのみである。しかし、生産期間わずか数十年の焼き物をめぐり、100年近くも論争したのだから、ちょっと滑稽にも思えてしまっただが。

九谷説華やかしころ、「有田のものはいかにも職人風の絵だが、古九谷は狩野派や琳派に連なる絵師の手になるもので、やはり品格が違う」などと喧伝されていた。

今となつては苦笑ものだが、それは、つまり有田の職人技は、その巧みさにおいて絵師にも匹敵するといってお墨付きに他ならない。その伝統を引き継ぐ現代の方々にも大いに期待したいものである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H24.2.8

もよりの扉内を指し

# 輝いていた時代 川底に

## 有田 陶片物語



陶片のお宝探しを楽しむ親子連れ  
—有田町赤絵町付近

### 歴史の川がら

先月の話である。8月1日と4日の両日、有田町歴史民俗資料館と特定非営利活動法人アリタ・ガイド・クラブの協働で、「歴史の川がらい」ベンジャラを探そう！が実施された。有田の将来を担う子どもたちに、

身近な郷土の歴史を、実際に体感してもらおうという企画である。

ベンジャラとは、地元で陶片のことを指す方言である。時折、雑誌などにも掲載されるのだが、有田の川にはやきものの産地らしく、日差しに照らされキラキラと輝く陶片が、川のおちこちに沈んでいる。川沿いには多くの登り窯跡が残されているため、数百年前のお

有田が世界の磁器生産の中核地として、ひとときわ輝いていた時代の陶片が、今なお川底でキラキラと輝き続けていたのだから、夢のような話である。(有田町教育委員会 学芸員・村上伸之)

ただ、各窯元が工場内に独自の窯を築き始めた明治以降、昭和の産廃法成立以前には、失敗品を川に投棄していた経緯がある。そのため、当初は江戸期の陶片など、多くを期待していたわけではなかったのである。ところが、今から約380年ほど前を筆頭に、300年以上も前の陶片も次々採集されたのは大変な驚きであった。

宝陶片の発見を目指して、親子で川の中に入り探す企画のだが、段々沢ガニに興味がる子どもや石投げに興じる子どもなど、それぞれが自由に郷土の歴史と自然を満喫したひとときであった。

# 有田の魅力を売る時代

## 有田 陶片物語



素材自体に価値のあった17世紀前半の製品(左)と価値の低下した19世紀の製品

### 価格と価値

出土陶片と日々格闘しつつ有田の陶磁史について思いを巡らせていると、有田焼の発展要因について考える機会がある。もちろん、理由はさまじまなのだが、その一

つに価格と価値の関係がある。

一見似た言葉だが、実は似て非なるもの。たとえば価格は同じであっても、価値の高さは人の好みによって異なる。いや、好み以上に有名作家物が割安という理由で、高価値に映る場合すらある。つまり、価値とは時や状況によって刻々と変化する。

により、次の100年間は成熟した技術を製品の普及に傾けることにより、主に価値の創出に努めた。ところが、磁器が日本の隅々まで普及、他産地にも生産が及ぶと、素材としての価値は著しく低下したのである。

しかし、日本経済の右肩上がりの成長は、素材としての価値の低下を緩和し、価値の緩慢な創造を許してきた。そしてパブルの崩壊。緩衝材の剥がれた状態の今日では、価格競争によらない新たな価値の創造が求められている。

有田磁器の場合、成立からおよそ200年間は磁器であること、つまり、素材自体に付加価値があった。最初の100年は新様式の開発や生産制度の改革

価値とは、個人の抱く感情に起因するため、目に見えるものとは限らない。つまり、製品力の向上に加え、有田という素材が持つ、環境やサービスなど目に見えない価値を有機的につなげ、有田そのものを売る時代となったのである。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

前回、古陶磁の製作年代を識別することは、時代の癖を読み解くことだと記した。それを探る上で、根幹をなすのは、窯跡をはじめとした遺跡の発掘調査の出土品である。

たとえば、登り窯の場合、焼成時の失敗品は、窯内の土・砂や窯壁片などとともに、窯体の片側に隣接する谷に逐次投棄され、土層として堆積する。この繰り返しにより谷は次第に埋まるが、これを逆に地表から土層単位で掘り進めると、新から旧へと時代をさかのぼることとなる。

人々の生活には、時代を問わず、常に流行を伴う。やきものとして例外ではなく、技術や技法、絵付け、器形など、各土層

## 窯跡から新旧判別

### 古陶磁の年代②



古い窯の上に堆積した新しい窯の廃棄土層(物原層)  
＝広瀬向窯跡

の中には、時期ごとの流窯跡を結合すれば、有田行がぎっしりと詰まって焼の創業から近代までの変化を捉えることができるのである。

土層とは、たとえば個別に着色した積み木を、縦に積んだ塔のようなものだ。隣の積み木(別の窯跡の土層)の中で、色も、実際の年代は不明だ(流行)の重なる部分を探して貼り合わせれば、操業時期のずれにより、さらに高い塔ができる。こうして、次々と多数の

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H24.6.25

### 古陶磁の年代③

これまでの2回、古陶磁の年代探査の方法について記してきた。窯跡の幾重にも堆積した土層には、各時期の技術の流行を反映した陶片が埋まっている。

たとえば、古い方からA・B・Cの流行を持つ土層が堆積し、別の窯では、C・D・Eの流行が

確認できたとする。ならば、共通するCの部分で結合すれば、AからEに至る変遷を把握できる。これをさらに別の窯で反復すれば、有田焼創業から近代に至る流れをつかむことが可能なのである。ただし、これで判明するのは、各層の相対的な新旧だけで、実際の年代は不明である。

これに肉付けする素材はさまざまだが、古文書や紀年銘の伝世品をはじめ、窯跡以外の遺跡など、

## 大火事の層有効な素材



文政11(1828)年の有田内山の大火直後の整地層(上部の白い堆積層)＝赤絵町遺跡

事として知られる江戸の明暦の大火(1657年)の層なども、実際に活用されている。このようにして、年代を窯跡の各土層に当てはめることにより、現在では数十年から数年単位で生産年代が鑑別できるようになってきているのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H24.7.23



# 中国の模造から脱却

## 有田 陶片物語



多くの人にとって、ほぼ年賀状の時期にだけ意識するのが干支ではなからうか。例年、1月最初の記事には、その年の十二支にちなんだ絵柄の陶片を紹介している。

ところが、今年は巳年。姿の似る昨年の龍は定番中の定番なのだが、さすがにへじとなると、有田町が保

### 和暦銘



高台内「承応貳歳」銘の製品(楠木谷窯跡 左:内面 右:外面)

管する100万点を超える膨大な出土資料の中にも、思い付く限り1点もない。

この十二支は通常、十干と合わせて年を表すが、これが一周するのが60年、つまり「還暦」である。今年「癸巳」の年。有田磁器関連では、さかのぼること360年前の承応2年に、ちょっとした出来事があった。高台内に「承応貳歳」という定型化した和暦銘がはじめて記されたのである。

年号くらいと思われるだろうが、江戸時代の有田磁器の場合、手本とした中国磁器銘を配するのが一般的で、いわば模造品であった。しかし、和暦銘の提示は、その地位を脱し、中国磁器と肩を並べたことを自ら誇示する意味合いがあり、いわば、ステップアップの年なのである。

「巳」とは、それを覚えやすくするため動物になぞらえたいが、もともとは草木の成長が極限に達し、次の生命が作られはじめる時期を表しているのだそうだ。有田焼創業400年に向かって、これまでの試行錯誤が極限に達し、次の新しいスタイルの窯業にステップアップを目指すには、まさに最適な年といえるだろう。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H25. 1. 14

# 国内市場 一強体制を確立

## 有田 陶片物語



日々陶片の山を目にしていると、そこに隠されたさまざまな歴史について、思いをはせることがある。たとえば、有田の窯業が成長を遂げた要因とは？ もたらした多様な側面があるにしても、磁器誕生以降の時々、窯業の技量に応じた、的確な成長戦略もその一つである。

1610年代に誕生した有田磁器

### 成長戦略

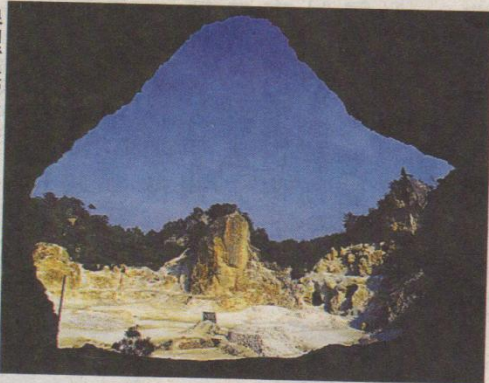
が目指したコンセプトは、当時、国内市場をほぼ独占していた中国製品との競合であり、その市場を手中にすることにあった。しかし、創成期に肝要なのは、市場において的を絞る、そこに産地としての力を集中させて、まずは風穴を開けることである。そのため、景德鎮など高級磁器とは直接ガチンコ勝負とはならない「陶器以上、中国磁器以下」という、巧妙な立ち位置に徹したのである。

ところが、次第に周辺の窯業地の成長が、その地位を侵食する脅威となる。これを振り切るための戦略が、差別化である。そのため、寛永14(1637)年には生産体制を整備し、他ではまねのできない、上手な陶工が、泉山の土質な原料を用い、上質な製品だけを作る制度に改め、盤石な防御を固めた。

そして、1640年代中頃には、景德鎮と同様なスタイルや質の製品及び、色絵の技法などを開発する。ついに高級磁器の産地と肩を並べ、中国の輸出の停滞に乗り国内市場の主導権を奪取、他の追従を許さない一強体制が確立したのである。

たかが陶片にすぎないが、その中にはこうした有田の生々しい歴史も垣間見えるのである。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

泉山で豊富な良質原料が発見されたことにより、磁器専業体制の確立が可能となった



H25. 2. 11

早いもので、もう3月。町のところどころで、早春の訪れを感じさせる梅の花が目につくようになった。春の花と言えは、今では桜を連想しがちだが、遠く奈良時代以前には、梅の花だったらしい。

有田の磁器は、すでに花と言えは桜

梅と鶯



有田磁器に描かれた「梅に鶯」(1640年代・山小屋窯跡)

日本的発想で鶯模倣?

となった江戸時代に始まるが、なぜかその影は薄い。もちろんなくはないのだが、春と言えは梅が夏の牡丹や秋の菊と並び、磁器創成期以来の定番である。

もちろん、これには理由がある。創成期の磁器は、限りなく中国風とすることが市場参入に際して課せられた命題で、有田磁器らしき以前に、中国磁器らしさが求められた。つまり、中国では草木の「四君子」の一つに数えられ、磁器の図柄にも繁用された梅文に倣ったのである。

1640年代以降、ますます梅文は増加するが、ちょっとした変化もつかえる。梅の枝に鶯がとまるようになるのだ。もっとも、梅に鶯は日本的な発想。中国をはじめ韓国でも、梅と言えは鶯。つまり、佐賀の県鳥でもあるカチガラスである。よって、使い手が勝手に鶯だと思いついただけで、実は、中国磁器の梅と鶯をそのまま模したのもかもしれないのだ。

中国の詩の一節に、「梅花香自苦寒来」の一文がある。「梅の花の良い香りは、苦しい寒さから生まれる」という意味である。有田の窯業が、今の苦しい寒さを糧として、良い香りを漂わせる時が訪れることを願ってやまない。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H25. 3. 11

磁器の文様。桜(左上)・菊と桜(左下)・鯉(右上)・鹿(右下)



有田の古陶磁の文様でも、桜の花は散見される素材である。ただし、花を付けた樹木として描かれることはまれで、通常は花のみが描かれる。たしかに、桜の場合は一つの木に咲く花の数が膨大なため、桜と分かるように描くのは容易ではなからう。

この桜とよく似た花に、同じサクラ属の桃や梅があるが、古陶磁の文様では判別が難しいこともある。ただし、桜の場合はどんなに粗雑に描いても、花びらの先端を割るという、お決まりのルールがあるため、それを手がかりに識別

素材により固有の描き方

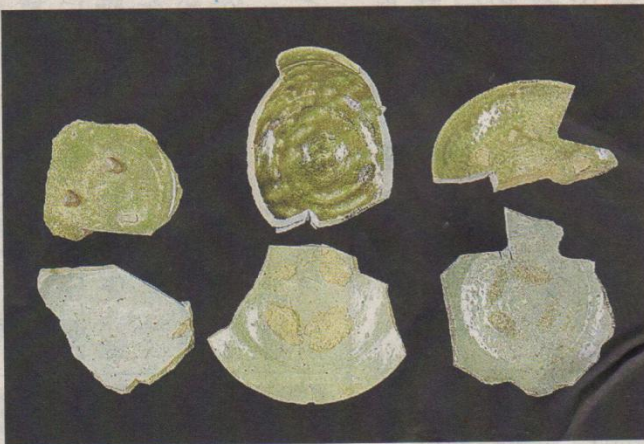
今年、日本各地で桜の開花が過去最も早かったらしい。そういえば、有田でも3月の中旬頃には、「えっ?もう桜?」とばかりに一斉に咲きはじめ、3月の下旬には満開を迎えた。佐賀県内はもとより、全国的にも桜を市町村の花や木とするところは珍しくないが、有田もその一つである。そのため、シーズン中は町のあちこちで、淡いピンク色の花の絨毯(じゅうたん)を目にすることができる。

できる。こうした、崩れても固有の痕跡を残す文様は比較的多く、たとえば、鯉(こい)の鬚(ひげ)や鹿の背中斑点などもその一例である。

世の中の移り変わりの早さを例えて「三日見ぬ間の桜」と言うが、有田焼の歴史にも常に時代を先取りするスピード感があつた。現代も守るべき伝統は守りつつも、時代に合わせたダイナミックな変化も必要ではなからうか。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H25. 4. 8

5月11日、佐賀大学ひと・もの作り唐津プロジェクトの主催で、「刊行『古唐津分析集』唐津焼陶片分析解説」と題したシンポジウムが唐津市民会館で開催された。同プロジェクトが佐賀や長崎の各市町から初期の窯跡出土陶器片の提供を受け、胎土や釉薬（ゆうやく）の理化学的分析を行った結果を解説したシンポジウムである。



有田町の分析資料の一部。左は小森窯跡、中央は小溝上窯跡、右は天神森窯跡の陶片

出土陶器片の分析

H25.6.3

## 原料採取地は狭い範囲

抽出した窯跡は五十数カ所、各窯数点ずつの分析で、総数は450点以上にも及ぶ。これは一度の分析数としてはこれまでの最多で、有田町でも小森窯跡、天神森窯跡、小溝上窯跡の3窯で各8点、合計24点が分析されている。

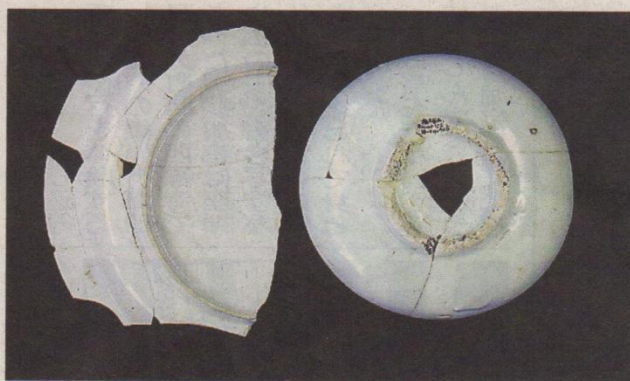
実際に分析された生のデータを提示されても、生粋の文系頭にはまるでピンとこないのだが、分析結果の解説を受けると、いくつかの興味深い点が心を躍らせた。

一つだけ示せば、各窯の原料採取地が、あまりに狭い範囲にとどまるのは、

ちょっと驚きであった。たとえば、天神森窯跡と小溝上窯跡は、中央の平地を挟んで、直線距離でわずか200mほどにすぎない。ところが、この二つの窯ですら異なるのである。

初期の窯業においては、往々にして、やきもの作りに情熱を燃やし、腐心してあちこち原料を探し求める陶工の姿がイメージされる。しかし、そうしたロマンは別として、現実には、当初から効率性を重んじる、純粋な工業製品にほかならなかったのである。（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

## 400年の技受け継ぐ「職人」



喜三右衛門が開発した赤絵素地の白磁（左）と従来の白磁（右）

先日、十四代酒井田柿右衛門さんが、お亡くなりになられた。有田で最も著名な陶芸家の一人であり、地元にとっても無類の痛手なのは言うまでもないが、日本の窯業界にとっても大きな支柱の一角を失ったことは、返す返すも残念なことである。

十四代に限らず、これまで酒井田家が有田の窯業界に残した功績は、計り知れないものがある。中でも、初代柿右衛門である喜三右衛門が、色絵磁器を創始したことはよく知られる。これは同家に伝わる文書にある、「赤絵、創始

の記載によるものである。

しかし、喜三右衛門が開発したのは赤絵であって、おそらく色絵磁器の創始を意味するものではない。従来の緑や紫など寒色系の上絵具を多用する重厚な色絵とは異なり、赤絵は赤などの暖色系の上絵具の映える純白で器壁の薄い素地に、余白を活かした軽妙な構図を特徴とする。そして、これを改良し1670年代に完成するのが、「柿右衛門様式」なのである。

この赤絵の技術は、開発後まもなく有田全体へと普及した。そして、有田の色絵の後継技術として窯業のDNAに刻み込まれ、意識の有無に関わらず、現代まで継承されてきているのである。

十四代は、「職人」という言葉を好まれていた印象が強い。秀でた陶芸家としての評価も、それを支えるのは「職人」の語に象徴される、有田焼400年の技であることを伝えたかったのだと解釈している。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

H25.7.1 (A)

十四代  
酒井田柿右衛門

有田

陶片物語

先日、有田町の中樽地区に位置する中樽一丁目遺跡において、有田で初めて磁器の製作工房跡が発見されたことが、新聞やテレビで報道された。現在、自ら調査を担当している遺跡である。

実は「窯焼き」と称された製陶業者自体は、17世紀の中頃で155軒、18世紀の中頃までには180軒ほどにも及んだことが文献史料により判明している。それほど希少なわけでもないのだ。それにもかかわらず、これまでその姿は、例えば有田陶磁美術館所蔵の『有

田皿山職人尽し絵図大皿』などから類推するしかなかったのである。

たしかに、絵画や文字史料は、内容を容易に推し量ることができ、大変便利である。ところが、常に虚偽や誇張などの危うさをはらんでおり、むやみに信じるわけにもいかないのだ。実際に大皿に描かれた工房の様子は、おおむね似通うとはいえ、発見された遺跡に比べ、かなり理想的で典型的な姿として描かれているようである。

発掘調査で発見される考古資料は、人の日々の営みの痕跡として残される

中樽一丁目遺跡

声なき声に耳傾け発掘調査



往時はロクロが据え付けてあった、<sup>ニ</sup>クルマツボ、と称される遺構(中樽一丁目遺跡)

ものである。よって、それ自体に虚偽や誇張は介在しない。しかし、絵画や文字史料のように自ら具体的に何かを語ってくれるわけではなく、それがどういうものなのかは、あくまでも調査する側の推察に委ねられる。

この遺跡の声なき声に耳を傾け、歴史の中に正しく位置づけてやることが、発掘調査を担当する者の大きな責務なのである。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之) H25.8.26(月)

有田出土の古武雄大鉢(赤絵町遺跡)



芸運動を通じて、大正時代以降注目されたこともあった。ところが、これにより逆に日用雑器という位置づけが定着し、古唐津の中に埋没し続けてきたのである。しかし、今日のように遺跡の発掘調査が進むと、各地の大名屋敷などでも使用されたことが知られるようになった。必ずしも、日用雑器ばかりとも言えないのである。

実は、この古武雄が急成長を遂げた背景には、<sup>ニ</sup>凶らずも有田の窯業の動静が大きく関与している。寛永14年(1637)、有田では窯場

「江戸のモダニズム古武雄」展

美術的に再評価の試み

先般、佐賀県立九州陶磁文化館で開催されている「江戸のモダニズム 古武雄」展を鑑賞してきた。「古武雄」とは耳慣れない言葉だが、従来は古唐津の一部に含まれてきた武雄市周辺の特異な陶器で、銅緑釉や象嵌、刷毛目の大鉢などに象徴される。どうやら、これを古武雄としてくり、美術的に再評価しようという試みらしい。

武雄市周辺の古唐津については、無名工人による日用雑器の中に美を追求した柳宗悦らによる民

の整理・統合によって、突然陶器生産が全廃された。当時、肥前の窯業の中心地で起きたこの事件によって、陶器生産は先導する中核地を失ってしまい、以後はそれぞれの地域がオリジナリティーを発揮する時代が訪れたのである。

かのアインシュタインは、「チャンスは、苦境の最中にある」と言ったらしいが、まさに、逆境を糧にして大きく開花したのが、古武雄なのである。(有田町教育委員会学芸員 村上伸之)

有田陶片物語

H25.11.18

# 古九谷、出土 実りの多さも格別

ばたばたと発掘調査に追われた一年が過ぎ、早くも12月中旬。梅雨時にはじまった今年の調査はまず雨に悩まされ、調査が二つ同時並行となった夏場には、猛暑というより酷暑で、現場の土はひび割れるほどガチガチ。続いて8月末からの雨では、今度は遺跡ごと水没したりと、ほとんど異常気象が身にしみた一年であった。

発掘調査は、実は、人目に触れる現地調査は全体のごく一部。実際には、その前後の手配や事務手続きが煩雑で、今年もやっと終えたところである。しかも、現地で得られた知見や資料をまとめる作業がこれに続き、数年くらいはあつという間に過ぎてしまう。ただ、その過程を経て、ようやく歴史を語らせる資料として、

活用できるようになるのである。しかし、今年の発掘調査は、過酷だったとはいえ実りの多さも格別であった。中樽一丁目遺跡では、磁器製作の工房跡が発見されたが、これは関連遺構のまとまった発見例としてはおそらく日本初である。また、山辺田遺跡では、いわゆる「古九谷」と称される日本で最初期の色絵磁器片が多量に出土した。この

色絵片、以前紹介した際には100点以上と記したのだが、その後整理作業中にも続々と発見され、最終的には500点ほどにも膨れあがっている。

来年も、発掘調査三昧の予感のする一年だが、すでに異常でもなくなった感のある異常気象だけは、勘弁願いたいものである。

(有田町教育委員会学芸員 村上伸之)

過酷だった今年の発掘

H25.12.16



磁器製作工房跡が発見された、中樽一丁目遺跡の全景



3月の発掘調査で再び磁器生産の本焼き工房跡が発見された中樽一丁目遺跡。有田町内

い有望な芽を一度や二度の失敗でつぶすべきではなかろうし、若気の至りを許す社会の寛容さも必要ではないかとは思ふ。

先月は、昨年日本初の磁器生産の本焼き工房跡が発見された中樽1丁目遺跡の別の地点の発掘調査に追われていた。発掘は理系の実験と同様、データを積み重ねるための重要な基礎的作業だが、堆積した土層を壊すため、第三者が後日再検

## データ積み重ねる基礎的作業

最近、STAP細胞の論文疑惑が連日マスコミをにぎわせている。世界的に注目度の高い研究のため大騒ぎになった感はあるが、理系と文系の違いはあれど若手研究者の未熟な論文など、私の専門分野でも取り立てて珍しいことではない。

80%の力で書けば、隠れた20%こそが文章の厚みとなるのだが、心身共にあり余るほどの勢いがある分、100%をも飛び越え120%の力で書きがちなのが若さなのだ。悪意のねつ造ならともかく、若

証するというわけにはいかない。土を掘るだけなので誰が掘っても結果は同じようにも思えるが、意外にも能力や経験、取り組む姿勢などによって得られる情報の質や量は桁違いなのである。

有田焼400年の研究も一朝一夕にはかなわない。次世代を担う若手を育て、研究の空白期を作らないことが揺るぎのない有田の歴史的基盤を築き、独自の文化を育む上では欠かせないのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

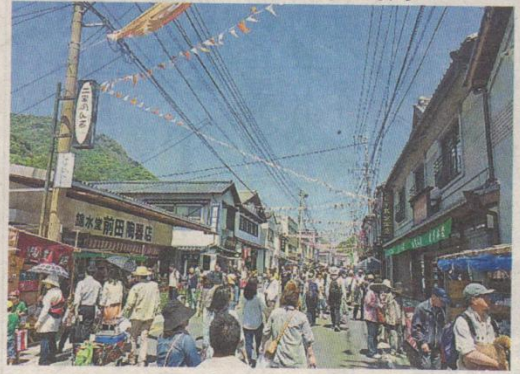
発掘と実験

H26.4.21

有田最大のイベント、春の陶器市が終わった。来客数も、100万人超えがすっかり定着。人口2万人程度の小さな町のイベントとしては、全国でも指折りの際だった行事と言えるのではないか。

ただ、近年よく聞くのは「今年もあまり売れなかった」という声。確かに、かつてのようにずっしりと重そうなリュックを背負う姿や、汗ばみながらも満足そうに両手に袋を提げた人などはほとんど

陶器市でにぎわう有田町内



見かけることがなくなった。

これは陶器市自体、やきものを買う目的から、ゴールデンウィークを楽しむイベントの一つとして、大きく性格が様変わりしつつあることを示す証左ではないか。そのため、とりあえず、より多彩な人々を呼び込む名物飲食の出店や、ゆるキャラブームなどを取り込んだ企画なども試みられている。ただ、それは本質的にはやきものの価値の再創造と連動すべきものであり、その意味では、現状はま

だまだ集客のためのコンテンツ羅列の域を出ていない。

江戸時代はひたすら技術の秘匿を追求することで有田焼ブランドの維持を図った。しかし、人、モノ、情報が自由に行き交う現代において、モノ自体に固執するブランド力の維持は容易ではない。今こそ文化や歴史といった、目には見えない付加価値の有効活用が求められる時代なのだと思う。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H26. 5. 19

H26. 5. 19 (A) 1/12

有田をはじめ、窯跡を抱える市町が一様に頭を悩ませるのが、陶片の盗掘である。近年は徐々に減少傾向にあったのだが、残念ながら先日、国指定史跡原明窯跡などが盗掘の被害を受けた。

何とも悪質なのは、窯跡の周囲に張り巡らした有刺鉄線を乗り越え、町教育委員会と伊万里警察署連名の警告看板のすぐ下を、派手に掘り散らかしていたことである。かなり挑発的で、明らかに確信犯だ。もちろん、すぐに警察による現場



国指定史跡原明窯跡の盗掘現場

## 歴史、文化守る強い姿勢

検証も行われた。

文化財は法律的にも、国の歴史や文化等を正しく理解するために欠くことのできないもので、公共のために大切に保存し、できるだけ公開するなど文化的活用にも努めなければならないとされる。つまり、私利私欲のために陶片を掘り出し、売買する行為など許されるはずもないのだ。

これに対し、関係市町では警告看板の

ほか、フェンスや柵を設けるなど対策を進めており、中には監視カメラを設置した窯跡すらある。しかし、公開・活用の観点からは、本来こんなことをすべきでないことはいままでもない。

心ない盗掘者により、不法に地域の歴史がむしばまれるなどあってはならない。郷土の未来のためにも、地域の歴史は地域で守る強い姿勢が必要であろう。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H26. 6. 16

26. 6. 16 (A)

左から17世紀、18世紀、19世紀の皿。時代の移り変わりの中での有田焼の変遷がうかがえる



ということではなかったかと思う。まったく同感である。ただその主張の前提には、これまでは伝統を守ることに終始してきたという捉え方があるように感じられた。

しかし、この連載でも触れたことがあるが、本来、産業としての有田焼の中に、伝統を守るものとして捉えた歴史はない。むしろ、目には見

## 歴史に学びつつ挑戦続ける

10月25日に有田町の九州陶磁文化館で開催された、エンジン02さが「ツタエルチカラ」と題した講演会やシンポジウムを聴講した。著名な講師陣による有田に対する辛辣（しんらつ）かつ熱い思いが語られ、会場を埋めた参加者の方々もあらためて、今後有田が進むべき道筋を問い直す絶好の機会となったのではなかろうか。

多くのパネラーの主張の要点は、伝統は伝統として、今日的な時代の流れに合わせて、有田も勇気を持って変わるべき  
H26. 11. 3

えない蓄積された技や時代を捉える感性などについては、有田が有田らしくあるための根として、今後もぜひとも継承すべきものであろう。しかし、その果実として生み出される製品については、たゆまない変化を遂げており、常に新たなチャレンジが試みられてきたのである。

憂うべくは、むしろ伝統を一律に守るべきものとして捉える今日の風潮がつくり出す、目に見えない壁ではないか。いま一度、歴史に学ぶ姿勢も必要であろう。  
(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

昨年度に続き、また今月から中樽一丁目遺跡の発掘調査が始まった。場所柄、磁器の製陶業者（窯焼き）の工房跡の発見が期待されるが、ただ、毎度のことながら梅雨時の調査は、雨続きの天気にも頭を悩ませられる。排水作業は日常茶飯事。地面はドロドロで肝心の掘るべき土層すら見えず、また、時には遺跡全体が水没したりと、調査以前の難事にも事欠かない。

かつては、「古九谷」=石川県(左)、「柿右衛門」=酒井田家(右下)、「古伊万里」=有田民窯(右上)として、別の生産地の製品として位置付けられていた有田焼



## 発掘資料で研究進む

こうした有田焼の歴史が振り返られるようになったのは、江戸時代後期のことである。当時は考古学などまだ見る影もなく、古文書類の中から目に付く記述を寄せ集め、また、伝世する陶磁器の比較などを通じて各種の物語が形成されてきた。

実は、そうした解明方法が一段落し、新たな方向性が模索され始めたのがちょうど有田焼創業350年の頃で、今日に至る半世紀の間に急速に発掘資料による研究が基幹分野の一つとなったのである。

ただ、これにより、かつては美しい歴史に彩られた陶芸の地として描かれた有田も、常に熾烈な競争に直面しながらも継承されてきた工業地の歴史へと、解釈がずいぶん変わってきたのは事実である。

調査や研究によって解明された、有田の経験や知恵の蓄積を、現代の営みの中でも大いに活用すべきである。振り返っても過去は変えられないが、それを糧として、過去を超える新しい一歩を踏み出すことは可能なのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

有田の磁器は、江戸時代においては、日本ではほぼ唯一世界に通用した工業製品であり、かつ最先端の技術やシステムを誇っていた。明治時代以降は個々の窯元が独自にターゲットを選択し、商品を開発するようになったが、江戸時代には藩の統制によって、それぞれの窯元が共存できるシステムが構築されていたのである。

たとえば17世紀後半には生産地域によりターゲットとする層の明確な振り分け



左は17世紀後半の高級品(柿右衛門窯跡)、右は下級品(広瀬向窯跡)

## 江戸時代は高級品主体

が行われ、それぞれ最高級品、高級量産品、中級品、下級品の生産地域が確立した。この頃、同時に稼働していた登り窯の数はおおむね20基程度と推測されるが、最高級品生産の南川原山が15%程度、高級量産品の内山が50%と、約65%は高級品生産の窯場で占められていた。

これは、当時磁器自体がまだ希少価値が高く、国内では大名をはじめとする上層階層などにユーザーが偏っていたこと

に起因する。それに合わせて生産の集約と集中が図られ、いわば中・下級品の生産は、次世代の普及に向けた種まきの意味合いもあったのである。

今日においても、明確なターゲットを定め、ひたすらそれに絞った商品開発と販売が求められる。少なくとも、万人に合わせた汎用的な商品は、本来の有田焼が目指した方向性とは異なるのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H26. 7. 15

昨年度に引き続き、7月1日から泉山1丁目遺跡と中樽1丁目遺跡の発掘調査を実施している。ただ、土の微妙な色調や感触を手がかりに掘っていく発掘作業には雨はまさに大敵。今年はあまりの天候不順で、よそでは8月の実働が4日だったという話も耳にしたほど。ようやく天気も安定してきたが、まるで夏を飛び越

できない、江戸時代以来の製土の様子を物語る貴重な資料である。この遺構は出土遺物から、廃棄は昭和初期と推測されるが、構築は遅くとも明治、幕末にまでさかのぼる可能性も皆無ではない。

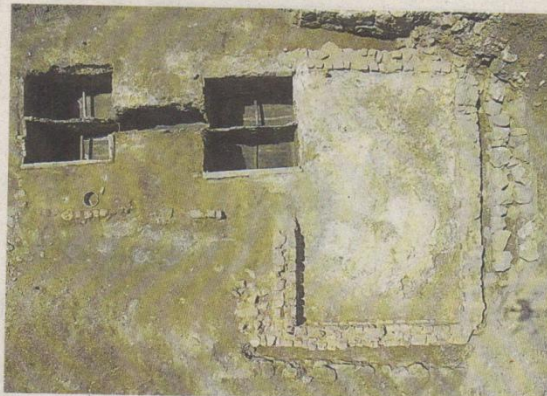
9月13日に現地見学会を実施したところ、町内外から100人を超える参加者があり、関心の高さがうかがわれた。有田焼創

## 見学会に100人超、関心高く

し、梅雨明けしたら秋という気分である。

今回の発掘調査でも、中樽1丁目遺跡では、江戸時代の窯焼き(本焼き業者)の工房跡が発見され、釉石粉碎用の踏み臼とみられる遺構や、素焼き窯と推測される遺構ほかが発見されている。

一方、泉山1丁目遺跡では、粉碎した陶石を水簸して粘土を作るための施設が、極めて良好な形で発見された。もはや絵画や文字史料でしか知ることの



発見された水簸施設。右側に白砂を貯蔵する施設。左側にその白砂を水簸するための二つの木製の水槽とそれらをつなぐ水路が設けられている

業400年を間近に控え、さらに郷土に対する関心が高まることを願っている。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

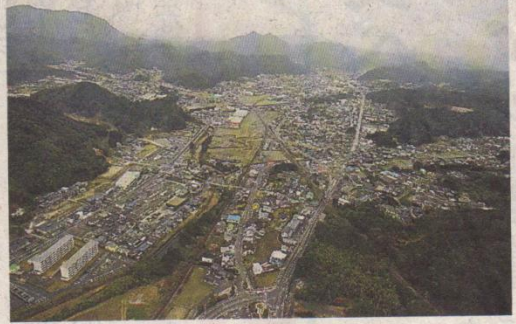
H26. 10. 6 (A)



有田にとって大きな節目となる有田焼創業400年まで、早くも半年を切った。すでに動き出した関連事業も多いようだが、これから来年の本番に向かって次々と新たな仕掛けが展開され、次世代に恥じない盤石な有田が築かれることを強く望む。

ただ、日常的に有田の歴史に深く接する立場として感じるのだが、節目の時だからこそ、じっくりと丁寧に有田焼の歩んできた道筋を吟味し、その長所や短所

日本磁器が誕生した有田町南原地区周辺の風景。人々は中央の平地に住み、周囲の丘陵に登り窯を築いて半陶半農の生活が営まれた



## 節目の時こそ歴史検証を

について、十分な分析を試みることも必要ではないか。むろん浮沈は多々あったにしても、400年間一度も伝統が途絶えることもなく、一貫して同じ場所で、一定の産業的規模を維持した磁器の産地など、世界でも希有なのである。そこには、必ずそれを可能とした理由が潜んでいるはずなのだ。

「屏風と商売は広げすぎると倒れる」、でも、「屏風を縮めすぎても安定しない」といったことわざもある。400年の間に形成された有田の産業構造は、バブル崩

壊時の先例にも見られるように、やみくもに規模を追うことには適していない。かといって、逆に産業としての過度の収縮は、有田から洗練された自由な発想や柔軟な体質を奪いかねないのである。

まずはフロントガラス越しの視界に頼って運転する車も、バックミラーなしではやはり安全性は心もとない。時には、歴史を振り返ってみることも必要なのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H27.7.27(A)

仕事柄『有田町史』を手にする機会も多いが、何度読んでも新たな発見があり、時には時代を越え、今日のあるべき姿を示唆するかのような記述に出合う。「陶業編Ⅱ」に掲載された次の一文もそうだ。後に「九州山口陶磁展」となる、明治39(1906)年開催の第10回「西松浦郡陶磁器品評会」における、審査長寺内信一氏の概評である。

「(前略) およそ輸出品の価格を安くすることは、現在のような世界の競争場

裏にあっては必要な条件であるけれども、ややもすれば粗製乱造に流れやすい。今日の急務は製造方法の改良進歩に努力して製造品の価格を安くすることであって、いたずらに手間をはぶいて製作を粗雑にすることによって価格を低くしてはならない。特にわが国の陶磁器の生産地を見ると、欧州磁器の模造に全力をそそぎ、日本古来の特色を失っている。器具は各国それぞれ、その用途が異なっているので、それに相応の変化を研究しなけ

## 有田固有の特色 継承訴え



当時「西松浦郡陶磁器品評会」が開催されていた「桂雲寺」の近景

ればならないが、美術上の方式は軽々しく国風の本体を忘却してはならない。幸い本郡の陶磁器は年々輸出品が増加しているが、その割には外国の模造に流れてはいない。今後とも有田固有の特色を保つことに大きな注意をはられることを望むものである。」

すでに100年以上も前の概評ながら、まさに現在や今後の有田に望まれる要点が凝縮されている。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H27.10.19(A)

有田

陶片物語

先日、県立九州陶磁文化館で開催されている「明治有田 超絶の美」展を拝見させていただきました。「世界を魅了した、日本が誇る驚愕の超絶技巧」のサブタイトルが物語るとおり、器面全体を細密な文様で埋め尽くした豪華絢爛な作品の数々は、まさに400年の伝統を持つ有田焼が目指した一つの頂点と言っても過言ではない。

有田では、1680年代になると主に対称的な構図で器面を埋める、今日「古伊万

里様式」と称される製品が普及し始める。続く90年代には、中国・景德鎮の嘉靖～万曆（1521～1620年）ごろの製品を手本とし、金彩をふんだんに散りばめたいわゆる「金欄手古伊万里様式」が生み出された。

この様式は、中国磁器と同様に、成形の精巧さや文様の細密さに価値の源泉があり、ひたすら具象的な美が追求された。これは、1680年代に再び世界市場へと復活を遂げた中国磁器に対抗するための新

金欄手古伊万里様式

工業力と手業の「超絶技巧」



明治有田の出土磁器(赤絵町遺跡)

たな戦略的な様式であるとともに、元禄期（1688～1703年）に台頭した国内の富裕な町民層にも強く支持された。さらに、技術や施文の簡略化によって、下級品生産までカバーできる汎用性の高さにより、根幹をなす様式として今日まで脈々と引き継がれたのである。その中でも、工業力と手業の絶妙なバランスの上に制作されたもの、それが「超絶技巧」と形容される明治有田の磁器なのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

27.11.16(月)

新たなステージへ

固定観念、成功体験払拭を

いわゆるバブル崩壊により右肩上がりの成長神話が崩れて、はや四半世紀。世の中の様相やシステムが大きく様変わりし、従来の方法では、もはやモノの売れない時代となった。むしろ有田焼も例外ではなく、売り上げの減少は、バブル崩壊前の6分の1とも8分の1とも言われている。ただ、何度もどん底をくぐり抜けてきたたくましさこそ、今日まで続く有田焼400年の力の源泉でもある。

有田

陶片物語

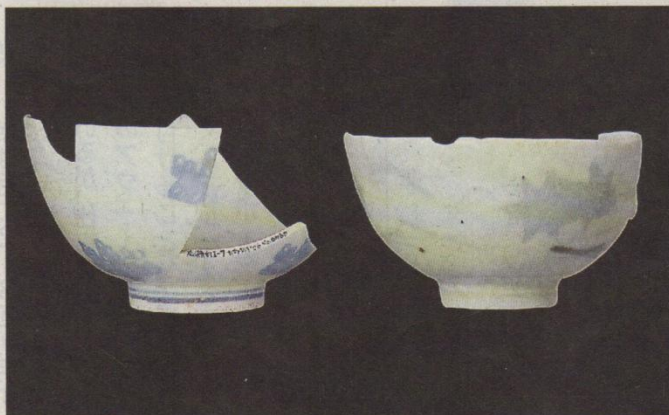


停滞期の成長を阻害する大きな原因の一つは、固定観念である。過去の経験から売れるものと売れないものを勝手に判断してしまい、新たな創造の芽を摘んでしまう。また、バブル期に象徴される過去の成功体験も、あの時はこれで売れたということへの執着が、創造の力をそぐには十分過ぎる大きな原因として機能する。

実は、それを克服した証しが、柿右衛門様式や古伊万里様式など、まったく新たなスタイルへの挑戦である。あるいは、それまで磁器とは無縁であった需要層を開拓すべく、あえて意識的に製品の質を落とし、少品種多量生産に徹した広瀬山や応法山などの例もある。常に市場の要求を敏感に察知することにより、新たなステージへと駒を進めたのである。

現在では、有田焼創業400年の記念事業などを通じ、固定概念とバブル期の成功体験の払拭が図られようとしている。2016年を新たなステージの出発点としたい。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)



広瀬山の1700年代前後(左)と、あえて質を落とした1720年代前後(右)の製品

H28.3.21(月)

先日、有田町をはじめ佐賀・長崎両県の8市町で構成される「日本磁器のふるさと 肥前」が日本遺産に認定された。「百花繚乱のやきもの散歩」のサブタイトルどおり、技術の源流を一つとする肥前としての一体感は維持しつつも、それぞれ競いつつ熟成してきた個性的なやきもの文化の様態が、ストーリーの大きな柱となっている。

その中で、構成文化財の一翼を担うかなめの一つが、各地に残る登り窯跡であ

盗掘現場を見学する合同会議の参加者  
—伊万里市松浦町の餅田窯跡



## 警察の力借り破壊防止へ

る。窯跡は、日本有数の窯業地肥前の歩みを、目に見える形で今日に伝える重要な遺産である。しかし、ひと頃よりは減少したとはいえ、現在でも盗掘による遺跡の破壊が続いており、残念ながら、この地域の地域らしさの象徴が徐々にむしばまれている。

その対策を検討するため、県文化財課、県警、市町教育委員会が集まり、第2回窯跡盗掘対策合同会議が先日、伊万里市で開催された。従来、県や市町の教育委員会が主体であった盗掘対策に、警察の

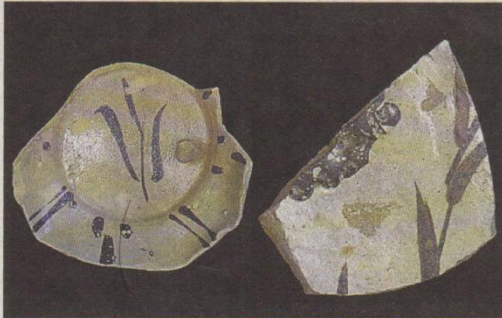
力も借りて、犯罪防止を図ることが目的である。

本質的には、国民共有の財産としての文化財である窯跡には、より多くの方々が訪れ、この地域への理解や愛着を深めていただくことが望まれる。しかし、警告看板、防護柵、監視カメラなど、現状ではむしろ人を排除するための施策が優先されつつある。こうした日本遺産の趣旨とも逆行する盗掘対策が、一刻も早く不要となる日が訪れることを願いたい。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H28.6.14

鉄絵を描いた施釉陶器。登り窯で大量生産し日本全国に運んだことにより、施釉や筆による施文を他の産地にも促した



能にし、やきものも用途別に器種分化が図られた。その後、節目ごとに中国や朝鮮半島の技術や意匠を導入しながらも日本文化の中で消化し、独自の陶磁文化へと発展させたのである。

素材としてのやきものは、土味や釉薬、絵の具などの差のほか、立体的な造作が可能で、表現力を発揮しやすく、創作領域の拡大が容易な特徴を有している。また、手取りの重さも価値の重要な要素と

## 施釉や筆の施文が一般化

文化とは「人間が自然に手を加えて、それが組織・集団の中で共通の価値を共有できるもの」とでも位置づけられるだろうか。個人が個人的価値を有しているだけでは、それは単なる趣味や嗜好であり、文化とは言えない。

その中でも、日本の陶磁文化は、1万数千年前に自然にある土を焼いて、今日では縄文式土器と称される日本で共通の価値を生み出したことにはじまる。また、農耕を中心とした定住生活のはじまりは、重いものを身近に多く置く生活を可

なるような作品や製品は珍しい。

ただ、この日本のやきもの文化も、鎌倉・室町時代頃の中世までは、ごく一部の高級陶磁を除けば、無釉の実用陶器が主体で、機能的価値に重点が置かれていた。しかし、大陸の技術を基盤とする肥前の近世窯業により、施釉や筆による施文の一般化が進み、美術的価値の大衆化が図られ、現代に至るのである。こうした点もあまり知られていないのだが、肥前陶磁の大きな功績のひとつである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H28.10.3

有田  
陶片  
物語



有田焼創業400年の年も、そろそろ残り1カ月ほどとなった。やはり、産地として400年もの長きにわたって伝統が途切れることなく継承されたことは、極めてすばらしく、誇らしいことである。ただ、当然その間

には、何事もなく平穩に伝統の蓄積がなされてきたわけではない。かつては、世界最先端の工業製品の一つとして、今日の産業が直面する課題と同様な、さまざまな難題を乗り越えてきたのである。

すると、プロセス・イノベーションと称される生産の効率化に力が注がれるようになり、生産性は向上するものの、革新的な製品が生まれにくい、生産のジレンマと呼ばれる状態に陥ったのである。



ドミナントデザインが確立した18世紀以降の内山(左)と外山(右)の製品の類似  
H28.11.28

たとえば、磁器のような画期的な素材が創始された当初は、それぞれの業者間で新種の製品開発が競われる、いわゆるプロダクト・イノベーションが活発になる。巨視的には、おおむね17世紀はこの時代であるが、やがて産業として成熟する18世紀になると、古伊万里様式という有田全体の標準的な製品デザインであるドミナントデザインが確

立した。再びプロダクト・イノベーションの時代が訪れたのは、積極的に西洋の技術を導入した明治時代である。現在は、有田焼創業400年事業などで、海外を含む外部からの情報を積極的に取り入れる機運が盛り上がっている。これを契機として、有田が新たな一步を踏み出す機会となることを願いたい。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

有田  
陶片  
物語



今月9日から1月15日まで、佐賀県立九州陶磁文化館において、有田焼創業400年記念イヤーの最後を飾る特別企画展「日本磁器の源流」が開かれている。

日本磁器の源流といえば、つつい朝鮮半島・李朝時代の製品を思い起こしがちだが、会場に所狭しと並ぶのは、14世紀から19世紀に至る、景德鎮を中心とした中国磁器の数々である。

景德鎮製祥瑞碗(左)と有田製の赤壁賦文碗(右)(ともに山辺田遺跡出土)



## 手本にした日用の中国磁器

そのほとんどは、今でも神奈川県で発掘調査に従事されている富永樹之さんが、出土資料に見かけるような伝世品をコツコツと収集し、九州陶磁文化館に寄贈されたものである。

一つ一つは、一生に一度目にする機会がありやなしやという名品ではなく、多くはかつて日本にも輸入され、消費されていた類いのもの。肩肘を張らずに、気楽に楽しむことができる展示である。

有田で始まった日本磁器は、李朝の生産技術をベースとしながらも、当初から競合品として製品の手本としたのは、当

時ほぼ国内市場を独占していた中国磁器であった。つまり日本磁器とは、いわば「李朝の技術で生産された日本人好みの中国風磁器」であり、日本磁器の源流として中国磁器を取り上げる意義がここにある。

参考資料として、山辺田遺跡出土の景德鎮製の祥瑞碗や、逆に中国磁器を模した有田の赤壁賦文碗なども展示されており、有田がどのような形で中国磁器の影響を受け入れてきたのかを考える上でも、有意義な展示である。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

特別展「日本磁器の源流」

H28.12.26

有田焼創業401年目の年が明けた。県や町が総力を傾けたバックアップ体制も、いったんは区切りが付けられる。この間にさまざまな機会を通じて練られ、積み上げられてきた数々の挑戦や実績を、いかに効果的に今後につなげられるのか。これからが、有田の本当の底力が試される時である。

日本の磁器は、李朝時代の朝鮮半島出身の陶工により開発されたことは、有田焼創業400年に伴う情報の広まりとともに

(左から)李朝磁器、中国磁器、有田磁器



情報網を持つ商人層のプロデュースによるものであろう。事前に、もっぱら中国

## 中国風を意識 商品開発

に、より多くの人々に知られるようになった。ただ、それゆえに先行する陶器の技術に段々と改良が加わり、その練度向上の帰結として磁器が完成したと誤解される方々も少なくない。実際には、日本磁器は誕生の瞬間から染付製品を基本とする中国風磁器であって、白磁主体の李朝風ではなかったのである。

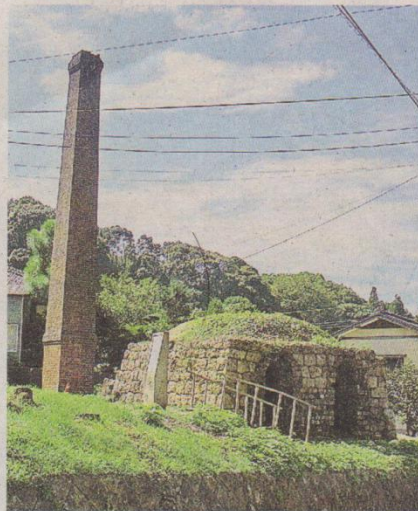
これは当時国内に流通する磁器市場をほぼ独占した中国磁器を意識した商品開発であり、おそらくは、外部との接点や

からの輸入に頼る呉須の入手や李朝にない技法など、中国風磁器製作に要する万端の準備を整え、まずは中国磁器以下、陶器以上の隙間の市場を創出したのである。

技術や製品には旬の時期がある。遅すぎてもだめだが、早すぎても消費者が付いてこれない。機を見るに敏の姿勢で、好機を逃さなかった有田焼。400年後の今も、そうであることを願いたい。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H29.1.23



応法猪子谷車室窯跡(町史跡)。明治になると、燃料に薪を用いる登り窯に代わり、西洋の技術に基づく石炭窯も築かれるようになった。

関連で語られることは珍しくない。ただ、それまで250年以上にわたりほぼ形を変えなかった生産現場の姿が、最も大きく変容したのも明治なのである。

有田は、磁器生産における絶対的な中核地として、長らくその生産技術を外部から隔離する一方、高い自尊心もあって、外部からの技術も受け入れない姿勢を貫いてきた。ところが、明治に全国への往来が自由となり、他の窯業地の状況が明らかになるにつれ、「井の中の蛙大海を知らず」ではないが、世の中ははるかに進歩していたことを痛感させられたのであ

## 貪欲に先端技術を追求

来年の2018年は、徳川幕藩体制が崩壊し、日本が新たな中央集権の国として生まれ変わった「明治」改元から、ちょうど150年。国においても関連施策の推進が決定され、これに応じて佐賀県でも「肥前さが幕末維新博事務局」を設置し、国と一体となって取り組む姿勢が示されている。

明治維新と有田焼。万国博覧会出品などに象徴される、華々しい海外輸出との

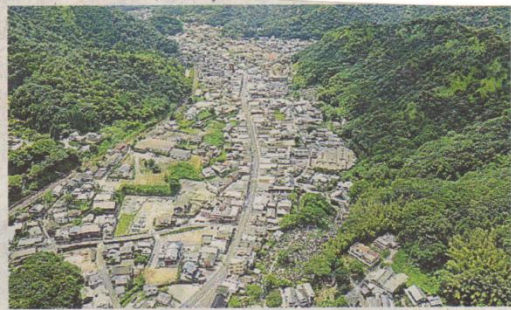
る。今日では、ごく一般的な棚板積みや匣鉢を積み上げる窯詰め技法は、瀬戸や美濃など東海地方の窯業を範としたものであるし、化学合成の呉須や石膏型など、西洋の技術を受け入れたものも多い。

ベースとなる本来の技術や精神は受け継ぎつつも、貪欲に先端技術を追い求めた有田焼。この明治維新は、有田の窯業の維新にもほかならないのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H29.2.20

114回目を数えた、今年の有田陶器市が終わった。まれに見る好天にも恵まれ、目標を上回る128万人もの来客があり、大変喜ばしい限りである。ただ陶器市は、日々人口の10倍前後もの来客で町があふれる大イベントである。期間中は町の姿も一変し、風情のある焼き物の産地としての景観や日常に触れることは難しい。有田焼創業400年を契機とし、町では陶



陶器市期間中は多くの来客でにぎわう有田内山の景観

## 保護・保存の上で活用を

器市に限らない通年観光を目指しており、ぜひ多くの方々に、独特な文化や自然に満ちた普段着の有田も堪能していただきたい。

観光と言えば、先日「観光マインド」という言葉が世間をにぎわせた。学芸員に限らず、今どきの文化財関係者に、逆に「観光」を意識しない人は珍しい。むしろ、積極的に文化財を観光資源として活用すべきであろう。ただ、あくまでも文化財サイドが前提とすべきは、文化財の保護・保存であり、その上で、それをいかに活用していくかという順序があ

る。

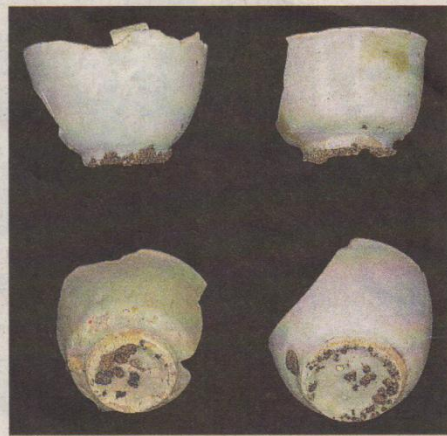
かつて、高度経済成長期頃に文化財関係者に求められたのは、「観光マインド」ならぬ、いわば「開発マインド」。今回と同じロジックで、開発を阻害する文化財関係者は一掃すべし、とでも言われかねない時代であった。しかし、不要なので壊せだったはずが、今度は観光資源としてもっと生かさないとはいけしからん、ということらしい。時代が違えばそれまでだが、風潮に流されず残すべきは残すことが必要なのであろう。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H29.5.15

すでに30年以上も、有田の陶磁史の調査・研究の現場に携わってきたが、いまだに初めて見聞きするような陶磁史用語に出会うことがある。「初源伊万里」もそうだ。

この用語にはじめて出会ったのは昨年のこと。骨董雑誌「目の眼」、今年3月号の特集の原稿を依頼された際に、陶器から磁器に移行する中間的なもの、いわば「初期伊万里」の最初の頃の製品だという。ただ、窯跡の発掘調査などを通じて、およそ接したことのない有田の古陶磁などないはずだが、



「初源伊万里」とも称される初期の下級磁器（左下は向ノ原窯跡、その他は小物成窯跡）

## 下級品が貴重な高級品に

とんと思い当たるものがないのだ。よくよく話を聞くと、染付文様のない李朝風の器形の白磁猪口などを典型とするという。

この「初源伊万里」の用語は、もともと秦秀雄(1898~1980)という、井伏鱒二の小説「珍品堂主人」(1959)のモデルにもなった古美術研究家が提起したものらしい。もちろん、近世陶磁研究では新参者の考古学など、まだ関わっていなかった時代のことだ。

結局、今日の発掘調査の成果では、「初源伊万里」なるものは、初期の磁器の中で

も、下級品として製作されたことが判明している。日本の磁器は当初から中国磁器を範として製作されたが、相対的に手間を省いた下級品の場合、本来陶工の持つ朝鮮半島色が残りやすく、高価な貞須の使用も控えたため、白磁が多かったのである。

下級品は伝世しにくいいため、窯跡の採集品を修復したもの以外は、ほとんど現存しない。そのため、かえって古美術業界では、貴重な高級品と捉えられたようである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H29.10.2

目に映る木々はまだ青さが目立つが、朝夕の冷え込みにはぐっと秋らしさを感じられるようになった。世間では、スポーツの秋やら食欲の秋やらさまざまな「秋」でにぎわう季節だが、職場の有田町出土文化財管理センターでは、まさに出土陶片の秋。エアコンのない収蔵庫は夏は蒸し風呂のような暑さで、とても長時間こもってじっくりと陶片を観察するどころではない。ようやく気候も穏やかになり、各種の調査に訪れる方々もぐっと増える季節である。

日常的に、何気なく陶片に囲まれて過ご

17世紀後半の上級品（柿右衛門窯跡）と下級品（広瀬向窯跡）



出土陶片の秋

## 下級品に出るコアな個性

していると、ふと気付くことも珍しくない。たとえば、地域や個々の窯場の個性がより鮮明に反映される製品、いわば生産窯の識別が容易なのは、上級品はともかく、これに続くのは中級品クラスではなく、意外にも下級品なのである。なぜか？ 上級品は、細部までこだわりを持って地域や窯場なりの技術や感性が盛り込まれる。つまり、可能な限りどんどん個性的な要素をプラスしたもの、それが上級品である。一方、逆に

下級品はマイナスを志向する製品。利潤との折り合い上どんどん要素を切り捨てるため、結果として、地域や窯場としてのコアな個性があらわになるのである。

有田焼は、19世紀以降おおむね下級品を切り捨てたことにより、現在では、こうした原理が見えにくい構造になっている。個性的な製品を開発する上で、ちょっと頭の片隅にでも置いていただけたらと思う。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

H29.10.30(月)

前回、「なぜ有田陶器市は、ほとんど磁器ばかりなのに、陶器市という名なのか？」みたいな、やきものの分類の謎についてちょっと触れてみた。江戸時代までの日本に磁器という区分はなく、磁器も陶器の一種。そのため、明治にはじまる陶器市も、そのなごりで磁器市ではないのである。今回も、その続きのような話を少し。

かの広辞苑で「磁器」の項目をめくると、「素地がよく焼き締ってガラス化し、吸水性のない純白透明性の焼物」とされている。つまり、磁器質だから磁器。至

中国の青磁（左）と青花（右）



磁器の概念

## 東洋では区分あいまいに

極明解である。これが、現代の日本人がイメージする、ごく一般的な磁器の概念だと思えば、当たらずしも遠からずというところか。

ところが、中国や韓国をはじめ東洋のやきものでは、磁器質でない磁器も、さして珍しいわけではない。別に権威のある辞典にあらがうつもりはないが、これが現実。たとえば、名品も多く知られる中国の古い唐代の白磁や宋代の青磁などは、磁器質で

はなく<sup>せうぎ</sup>磁器質である。象嵌技法に優れる朝鮮半島の高麗青磁も、またしかり。

実は、本来、磁器質であること自体は、磁器の必須要件ではない。これは14世紀初頭ごろの元代に、中国の景德鎮で開発された「青花」、つまり、日本でいう染付磁器の胎質を基準としたもので、日本で磁器がはじまった頃には、すでに青花のような磁器が、一般的になっていたからなのである。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

H  
30.2.11

受験シーズン真っ盛り。自分の大学受験はもうずいぶん昔のことで、ほとんど忘却のかなたに消え去ってしまったが、劣等生にはやはりかなりつらい時期だったことだけは鮮明に記憶している。これから楽しい大学生活が送れるように、受験生の皆さんにはもう一踏ん張りしてほしい。

先日、大学入試センター試験の日本史Bの問題に挑戦してみた。何とか合格点は取れそうだが、やはり普段近世史だけに専念にしていると、ほかの時代の記憶はかなり

近世の屋敷跡の発掘調査風景（有田町中樽一丁目遺跡 2015年）



## 昭和の終わりにから激変

曖昧である。それに、最近の問題は、かつてのように語呂合わせの年号丸暗記だけではなかなか歯が立たない。現在のように歴史を流れて捉えるのは好感の持てることだが、テストに出題されるようなある程度評価の定まった内容はともかく、歴史の解釈は時代とともに流動的で、必ずしも答えが一つというわけでもない。

有田焼の歴史もそう。日本磁器の歴史的研究がはじまったのは江戸時代後期のこと。その後、明治に盛んになり、大正、昭

和と少しずつ解釈を変えながら歩んできた。ただ、劇的な変化は、昭和の終わりからのことである。

とりわけ、近世史の分野に考古学が本格的に参入し、全国的に近世遺跡の発掘調査が急増したことが大きい。もうすぐ、「近世考古学」が提唱されて50年。近世遺跡の発掘調査では、出土する有田焼から、今でもさまざまな人々の営みが解明されつつある。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

この記事が掲載される頃には、唐船城築城800年記念事業を締めくくる11月11日の記念式典も終わり、およそ1年をかけて実施してきた各種の事業もおおむね一段落しているはずだ。その前週の3日、4日に現地の唐船城周辺で開催したイベントには、本当に多くの方々にお集まりいただき、主催側の末席を汚した者の一人として、ほっと胸をなで下ろしているところである。

この記念事業では、これまで唐船城や有田氏を周知し、身近に感じていただくための各種の講演会やイベントを行ってきた。

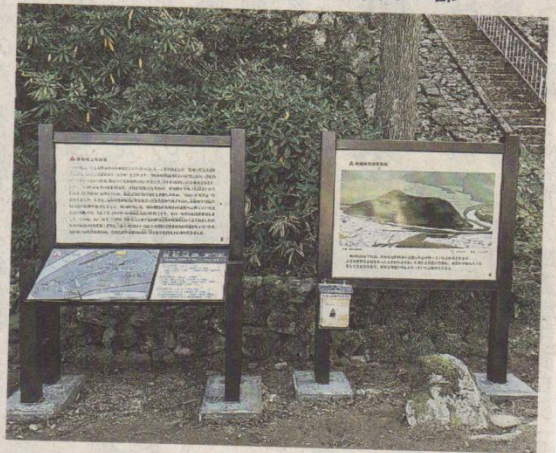
## 新装した唐船城に足運んで

1年前には唐船城のあれこれどころか、その存在すら知らない町民も少なくなかったのだから、せめて名前くらいは多くの方に覚えていただけたのではないかな。

ただ、これまでその成り立ちや推移、城を築いた有田氏のことなどを知りたくとも、直接小難しい文献をひもとくしか手段がなく、多くの方々にとってかなり敷居が高かったことは確かである。

これに対応するため、今回の記念事業の

唐船城に設置した説明板の一部



一環として、唐船城に三つの散策コースを設定し、ところどころに15枚の説明板を配置して現地を散歩しながら学べる環境を整えた。

また、同時に「唐船城散策あんない」と題した無料のガイドブックも作成し、これ1冊で唐船城や有田氏の概要を知ることができる。ぜひ、新装なった唐船城に、一度足を運んでみていただきたい。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

H30.11.13



先日の台風7号は、佐賀県内でもさまざまな文化財に被害をもたらしたようだ。有田町内では、毎度のことながら心配させられるのが、国指定天然記念物「有田の大イチョウ」である。今回も、大量の枝葉が落下したが、幸いにも大きな被害には至らなかった。

この大イチョウは、日本最大クラスの大きさで、高さは30.5m、樹齡は千年ほどと言われる。記録では、

樹木医による診断作業の状況



で大枝の落下を防ぐ、ケーブリングの作業を実施予定である。

ところで、この大樹には一つの伝説がある。雌樹から雄樹に変わったというものだ。樹木の所在する弁財天社の神託によると、世人は往々に実を得るために雌樹ばかりを植樹するため、神木のイチョウが急成長し、雄樹に変わって近隣の雌樹に結実させて、全町民に寿福を与えた。そして、

## 枝葉の落下 大正期から問題

枝の落下はすでに大正時代には問題となっており、それから1世紀近くも解決できていない。

この難題を解決すべく、先日、はじめて成育状況の診断作業を実施した。NP O法人「自然への奉仕者・樹木医協力会」に委託して、

音波で樹木内の腐食・空洞を調べる精密診断や周囲の土壌診断、実際に樹木医が樹上に登って外観診断などを行った。正式な診断結果はまだだが、健康状態はおおむね年相応ということらしい。この結果を受け、次に枝と枝をロープでつない

その寿命は無限であると告げられたという。

神託の真偽は知らないが、少しでも成育状況を良好なものとするため、今後各種の対策を講じていく予定である。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H30.7.23(月) 作

激烈な暑さに悩まされた今年の夏だが、9月も半ばともなると、朝夕は肌寒さすら感じるようになってきた。一步また一步と秋到来の気配だが、今年の有田の秋は、各種事業やイベントのてんこ盛り。恒例の秋の陶磁器まつりに加え、東地区を中心に明治維新150年事業、西地区を中心に唐船城築城800年記念事業が展開され、例年にも増して熱い秋になりそうだ。

唐船城の事業は、有田の地域をはじめて一体的に治めた有田氏の、唐船城築城800

大正14年(1925) 椎谷孟保著『唐船山三星鑑』に描かれた唐船城跡



## 空白の400年埋める起点に

年を記念するもので、その顕彰はもちろん、今のような時世のご多分に漏れず、地域おこし、町おこしの意味合いも強い。そのため、一過性のお祭りとしてではなく、ここを起点として、将来に線や面としてつなげていく工夫が大切である。

ただ問題なのは、唐船城や有田氏に関する町内の認知度のあまりの低さ。ここ400年の歴史は、窯業史を中核として著しく研究が進み、町の内外を問わずかなり知られるようになった。しかし、その前の400年

は、もはや空白と言ってもいいほどに、地域の記憶の中からは抜け落ちているのである。

この歴史の空白を埋めていく作業の起点とすべきことも、今回の事業の究極の目的の一つであろう。人々が経験を積むことで成長するように、有田の地の経験とも言える歴史を町民が幅広く共有することで、地域としても、より大きな成長が期待できるのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

H30.9.17(月) 作

11月25日、唐船城築城800年記念事業の実施期間が終了した。クライマックスの、11月11日の記念式典も大盛況。一連の事業を通じ、改めて有田の成り立ちを振り返る絶好の機会となった。

唐船城は、平安末期から有田郷を治めた有田氏によって、通説では建保6（1218）年に築かれたという。有田氏は、松浦氏の一族で、第52代嵯峨天皇の流れをくむ嵯峨源氏に連なる。延久元（1069）年に荘園管理のため現在の大阪市から松浦市の今福に下向した源久は、松浦を名乗って勢力

## 松浦一族の流れくむ有田氏

を拡大。その後、48党53家と称されるほど多くに分派、松浦地方一帯で勢力を誇った。

ただ、有田氏はうまく男子が続かなかったためか、すでに3代目重の娘婿として今福の松浦宗家から4代目給を迎えている。また、その後室町時代から約200年もの間、佐世保市に拠点を移した松浦宗家自体が有田郷も兼領するようになり、有田の名字も途絶えたのである。

H30.12.11 戦国時代には、松浦一族の結束も大きく

唐船城や有田氏を紹介したガイドブック『唐船城散策あんない』（無料）



揺らぎ、争いも頻発した。松浦宗家も平戸松浦家の手に落ち、唐船城の家臣団は、いったんは宗家の継嗣となっていた盛を島原の有馬家から迎えて有田の名を再興した上で、宗家奪還の戦いを仕掛けるも大敗。その後、天正5（1577）年には龍造寺氏に降伏し、その一族が有田氏を継承したため、松浦氏一族としての有田氏の家系はついでなのである。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

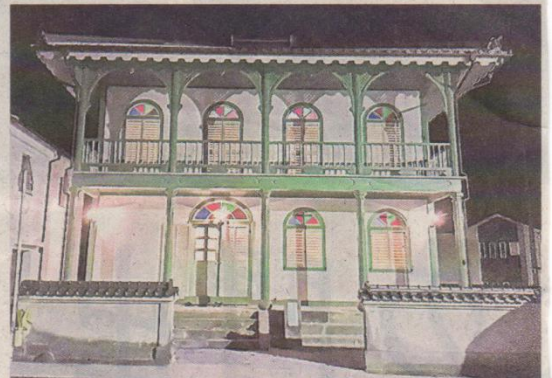
「旧田代家西洋館」。いまだにひと呼吸置かないと思い出せないほど、まるでなじみのない名称である。もちろん、すぐにピンときた方は、よほど有田の歴史に興味をお持ちの方に違いない。

昨年10月19日、国の文化審議会の文化財分科会で、佐賀県重要文化財「有田異人館」を国の重要文化財に指定するよう答申が出された。ただ、これは文部科学大臣に対する答申であり、決定後官報で告示された日をもって、指定となる仕組みである。

## なじみのない名称で国重文指定

年末も押し迫った12月25日、ようやく「官報告示号外第284号」で指定が決定したが、その文化財名称が「有田異人館」ならぬ、冒頭に示した「旧田代家西洋館」なのである。「製磁町有田の明治初頭の繁栄を伝える外国人接待施設」として、5種類ある指定基準の中から、「学術的価値の高いもの」という項目が適用された。名称は、明治9（1876）年の建設当時に近い文献史料に「西洋館」とあることから新たに国で名付けられている。だが、一見洋風な外観ながら室

国指定重要文化財となった旧田代家西洋館（有田異人館）



内は畳敷きなど和洋折衷の建物であり、まだなかなか「西洋館」の名がしっくりとこない。

正式な指定の告示日を知ったのは、その数日ほど前。『広報有田』1月号の「指定されます。」を「ました。」へと、校正ぎりぎりでも変更するのがやっと。まだ周知の作業もできていない状態である。年始休みも明けたため、早急にこれから取り組む予定である。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

有田

陶片物語

有田の中で、比較的よく目や耳にする言葉に「古伊万里」がある。文字通り古い伊万里焼という意味だが、もちろん伊万里産の焼き物ということではない。

江戸時代に重い焼き物を大量に運ぶには、船を利用するしか方法がなかった。有田で誕生した磁器は、同じ佐賀本藩の近隣の港である伊万里まで陸路で運ばれ、そこから船積みされて全国へと運ばれた。その後、隣の大村藩や平戸藩でも磁器が生産され、各藩の港からも積み出されるようにな

古伊万里様式の製品



古伊万里とは

江戸期の総称か、製品群の呼称

ったものの、すでに名称が定着していたため、肥前磁器の総称として「伊万里焼」と呼ばれたのである。

つまり、もともと「古伊万里」とは、古い肥前の民窯磁器の意味であり、大正から昭和初期ごろに名称が定着している。ところが昭和30年代には、研究の進展とともに、「古伊万里」の中から「初期伊万里」が分離され、「柿右衛門」や「古九谷」も有田の民窯製品であることが明らかになってきた。

これに伴い、「初期伊万里」から「古九谷」、そして「柿右衛門」へと続く、製品の時期的な様式変化として捉えられるようになり、「古伊万里」はそれに続く、<sup>きんらん</sup>金欄手などに象徴される対称的な構図を一面に配した、華やかな製品群の呼称となったのである。

しかし、現在でも元の区分の名残で、江戸時代の伊万里焼の総称としても使われることも珍しくない。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

R1. 7.29 (A)

有田

陶片物語

1610年代に始まる日本の磁器は、朝鮮半島の技術を基盤とし、そこに中国の技術を補完的に組み込むことによって、当初はひたすら中国風を目指した。しかし17世紀後半には、中国に代わって世界の磁器の中核的な産地に登り詰めたことにより、急速に和風磁器へと転換が図られたのである。

その17世紀的な磁器の一つの到達

柿右衛門様式の「色絵竹虎文皿」(左)と明治の古伊万里様式の「色絵窓絵花鳥文皿」=有田陶磁美術館蔵



二つの到達点

余白の美と超絶の美

点が、いわゆる「柿右衛門様式」で、余白の美などと称されるように、たっぷりとした白地の中に、繊細な非対称な構図を配置する。この余白は、「無」の表現ではなく、その空間の中に、見る者が頭の中で自由に絵を描くことによって完結する、日本的な感性が盛り込まれた様式である。

一方、こうした無駄を極限まで省いた様式の対極にあるのが、「古伊万里様式」である。可能な限り器面いっぱいに対称的な構図を埋め込んでおり、どれだけ手数をかけ

たかが、基本的に価値の源泉となる。

1680年代から海外輸出に陰りが見え始めたことにより、国内のより幅広い層へと磁器を普及させる必要が生じた。その際、やはり「柿右衛門様式」のような抽象的な美ではなく、分かりやすい「古伊万里様式」的な価値観が好まれたのである。この技術の到達点がいわゆる明治伊万里で、超絶の美ともてはやされるほどに、凝った技巧が印象的である。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

R1. 8.26 (A) / N27

有田

陶片物語

前々回、「<sup>せっき</sup>磁器」という種類の焼き物は、明治時代にヨーロッパの焼き物の分類である「stoneware」を直訳して誕生した区分だと記した。現実的には「磁器」は日本人にはなじみが薄いため、驚きはないが、「磁器」もそうだったとしたらどうか。

日本の江戸時代以前の焼き物の分類は、「土器」と「陶器」の2分割である。「磁器」どころか、「磁器」すらなかったのだ。やはり「磁器」同様、明治時代にヨーロッパの「porcelain」を「磁器」と訳し、分類の中に組み込んだものなのである。

実は、「じき」と読める焼き物を表す単語には、「磁器」に加え、「瓷器」もある。中国では「瓷器」の表記が一般的で、日本



中国・原始青瓷（左上）、中国・青花磁器（左下）、韓国・粗質白瓷（右上）、有田・染付磁器（右下）

## 日本は「磁器」、中国は「瓷器」

でも古代の<sup>はいゆう</sup>灰釉陶器や緑釉陶器は「瓷器」と総称され、それぞれは「白瓷」「青瓷」などと呼ばれていた。

この「磁」と「瓷」の違いは、前者が14世紀初頭ごろから中国景德鎮で盛んに焼かれ始めた元青花のスタイル、つまり、磁胎で染付製品を主体とする種類を指すのに対

して、後者は主に施釉した硬質の焼き物全般を広く含んでいる。

日本やヨーロッパでは、すでにこの染付製品主体の磁胎の磁器普及後に磁器が創始されるため、磁器と言えば、特にこうした種類の製品を指すようになったのである。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

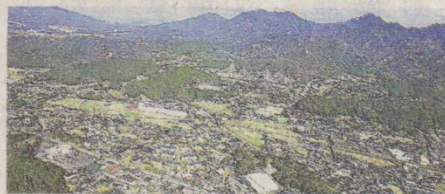
R1. 11. 18 (A)

LINE@「つぐね」

陶片物語

観光関係をはじめ、陶磁史に関する各種の原稿の校正を依頼されるが、近年、磁器の創始に関わる部分については、ちょっとその内容が様変わりしつつある。

昭和の時代には、「元和2（1616）年に、陶祖李参平は、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」という内容が、疑うことすらためらわれるほどの定説であった。しかし、ここ



日本磁器が創始された南原地区周辺の景観

らである。ところが、それを南原地区の窯場に単純に置き換えたのでは、逆に古文書との整合性が取れなくなる。

しかし、泉山が最初の磁器原料の採掘地

## 日本磁器の始まり 泉山の発見は後年

から、現在では天狗谷窯跡はほぼ姿を消し、発掘調査の成果などから、小溝窯跡をはじめとする有田の南原地区で磁器が創始されたことはかなり周知されるようになった。ところが、逆に、これが混乱の始まりともなっているのである。

かつて、天狗谷窯跡が磁器創始の窯とされたのは、古文書の中に、泉山発見後、最初に白川天狗谷に窯を築いたと記されるか

でなかったらどうか。当初は近隣の原料を用いて南原地区の窯場で磁器が創始されたものの、原料が枯渇し始めたため、方々を探し回り、ようやく発見したのが良質で豊富な埋蔵量を誇る泉山だったのである。そして、発見後、最初に天狗谷に窯を築いて、今日の有田に通じる産業的磁器専門体制の基盤が築かれたのである。

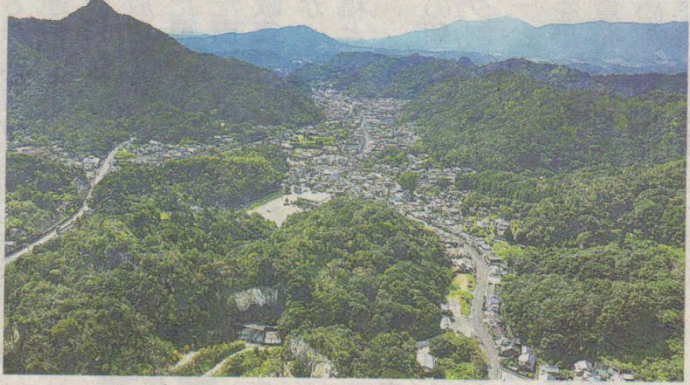
(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

南原地区

R1. 12. 16

先日、佐賀大有田キャンパスで開催された「窯業地域における文化的景観の保存と活用」と題したシンポジウムに参加させていただいた。2人の大学教授による講演とパネルディスカッションで構成されており、全体を通じて大変興味深い内容であった。

シンポジウムは、主に小鹿



有田内山の景観（東から）

類例のない磁器の町「内山」

## 均質の製品、大量生産

田（大分県日田市）や小石原（福岡県朝倉郡東峰村）との比較で話が進んだが、よくあることではあるが、有田の場合は内山と比較されていた。しかし、実際にはそれらとの比較なら、むしろ黒牟田や応法、南川原などの地区が類似しており、国内にはほとんど類例のない生産形態の町として誕生した内山とは、大きく性格が異なるのである。

内山は、かつて佐賀藩が磁器生産の産業化の拠点を目指して、人為的に山間を拓いて造った町である。ここでは、それぞれが

独自の性格を持つ外山の各地区と異なり、内山全体で均質の製品を生産する体制が取られた。つまり、全体が擬似的に一つの窯場のような性格を持っており、製品もどこの窯場のものか、ほぼ見分けがつかないほどある。

これは、当時の最先端産業として、均質な製品を効率的に大量に生み出すためのシステムであり、近世を通じて、それぞれの時期に最も需要の多いランクの製品の生産が、割り当てられたのである。

（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

R2.1.27

陶山神社の境内にたたずむ国の登録有形文化財の磁器製鳥居が、約130年の歳月を経て、このほど再び往時の輝きを取り戻した。

明治11（1888）年、神事当番町の稗古場町によって奉納されたものだが、長年、屋外で寒暖差や風雨にさらされ、磁器本来のあでやかさを失い、経年劣化でひび割れや破損が目立って、突然、破片が落下しかねない危険な状態となっていた。見かねた地元有志の方々の尽力により、町の内外から広く寄付が募られ、昨年11月より修復作業を開始、3月には足場を組んでの最終的な現地作業が行われた。

修復された陶山神社の磁器製鳥居  
＝有田町大樽



## 柱の中身は赤土だった

今回の修復の目標は二つ。陶山神社保管の落下破片を元通りに復元し、今後落下の危険性がある部分も確実に接着して安全対策を図ること。また、設置からこれまでの修理状況についても可能な限り調査して記録を残し、今後の管理の参考となるようにすること。加えて、表面にこびりついた汚れについては、できるだけ落とす方向で作業を進めることとなった。

修復作業中、意外な事実も判明した。鳥

居の両脇を支える2本の柱。割れ口の随所に白から灰色のドロドロの噴出物があり、磁器質の柱の中はモルタルかコンクリートでも詰めて強度を図っているものと考えていた。ところが、何と中身は赤土を突き固めたもの。そのため、この赤土が雨水や凍結などにより収縮と膨張を繰り返し、表面に多くのひびを生じたのだらうということが判明したのである。

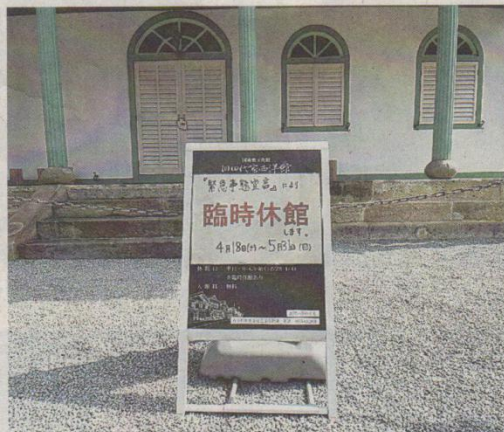
（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

陶山神社の磁器製鳥居修復

R2.4.20

まだ安心には程遠いものの、国内ではようやく新型コロナウイルス騒動もひと山越えて、徐々に日常の暮らしを取り戻しつつある。ただ、かつての日常かと言えば、そう短絡的な話ではなく、これからがコロナ後の日常を探る新たな日々となることは間違いない。

有田町では、現在、町有の文化財関連の展示施設だけでも、有田陶磁美術館や旧田代家西洋館をはじめ五つの施設を運営しており、やはり今回の騒動には日々翻弄され



旧田代家西洋館の休館をお知らせする案内表示

## 新しい運営方法を模索

続けてきたところである。

全国で緊急事態宣言が解除されたことに伴い、博物館などの文化施設の休業要請も解除され、続々と各地の施設も再開されている。各業界のご多分に漏れず、日本博物館協会などから「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」が示されるなど、運営に当たってはさまざまな指針が提示されている。

規模も違えば、展示資料の種類や置かれている状況も異なる全国の施設が、一律に

ガイドライン通りに運営できないことは当然である。しかも、実際には、資料の貸し出しや資料調査への対応、施設や所蔵備品などによって異なる適切な消毒・除菌方法をはじめ、指針には触れられない、いわば裏の悩みが多いのも事実なのである。

一日も早く、心置きなく公開できる日々が訪れることを願うが、まだしばらくは、新しい運営方法を模索する日々が続くであろう。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

R2. 6. 16 (木) 佐野

## 磁器製鳥居 過去に台風被害

4月のこの連載で、国の登録有形文化財、有田・陶山神社の磁器製鳥居の修復完了についてお伝えした。明治11(1888)年に奉納されたものだが、経年劣化でひび割れや破損が目立ち、汚れのこびりつきにより当初の艶やかさも失われていた。そのため、この惨状を見かねた地元の有志の方々により磁器製鳥居修復準備委員会が組織され、広く寄付を募り、無事往時の輝きを取り戻すことができた。

この修復に関して、このほど修復準備委員会により、「磁器製鳥居修復事業報告書」が刊行された。修復の経緯から現況、そして作業の一部始終に至るまで、六十数頁にわたって詳細に記

録され、この鳥居に関する現状で把握できる最も詳しい資料であるとともに、今後の修復の機会にも大いに役立つ内容となっている。

報告書にもあるが、実は、この鳥居は昭和36年に一度修復が行われている。昭和

令和元年 有田町教育委員会

### 磁器製鳥居修復事業報告書

陶山神社歴史資料館 (登録有形文化財)

2020

磁器製鳥居修復準備委員会



「磁器製鳥居修復事業報告書」の表紙

2020年 6月 30日 印刷

31年の台風で、何と鳥居上部の笠木や島木の部分がすっかりすべて吹き飛ばされ、“郷土の名折れ!”という声もある中、放置は続き、5年ほどもの間、笠木や島木、それに「陶山社」と刻まれた神額もないまま無残な姿をさらしていたのである。

この修復報告書の印刷は少数で、現在入手は困難である。しかし、ご寄付に賛同いただいた方々をはじめ広く文化財修復の周知を図るため、有田町歴史民俗資料館のホームページ上でPDF版を公開中である。興味をお持ちの方は、ぜひご覧いただけたらと思う。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

R2. 7. 14

この「有田陶片物語」の連載も、今月でちょうど10周年を迎えた。4週に一度。月1回程度とはいえ、単純計算で10年では120回超。もともと十分な元ネタすらなく、これほど長く続くとともにつゆ知らず。今にして思えば無謀そのものである。おかげで、毎回薄氷を踏む思いで、火事場の馬鹿力よろしく、ネタをひねり出している次第である。

この連載で思い知らされたのが、短文の

第1回の記事に掲載した、有田の朝鮮風白磁(右)と中国風染付磁器



## 400年前の決断が今に

連載10年

難しさ。職業柄、長文の執筆には比較的慣れているはずだが、逆に、少ない文字数にはいまだに手を焼くこともしばしば。つい欲が出て、中身をてんこ盛りしたくなるころを、グッとこらえて絞りに絞る難しさは、毎回苦闘の連続である。

あらためて振り返ると、連載第1回目のイントロは、時節柄、107回目の有田陶器市。「店先を華々しく飾る多種多様な磁器の数々は、日本の陶磁文化の多彩さを物語っている」とし、「それは400年前の一つの決断がもたらしたものと締めくくって

る。

400年前の決断とは、李朝陶工の手により誕生した有田磁器だが、無文の白磁が基本の李朝磁器ではなく、当初から多彩な染付文様の中国磁器を手本としたことにある。日本の磁器は、唯一有田で形成された一つの技術が、直接的、間接的に全国へと伝わったものである。よって、もし有田で最初に陶工由来の李朝風が選択されていたなら、現代の日本磁器もまるで異質なものとなっていたに違いない。

(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

R2.5.18

大イチョウと古民家

有田の泉山地区に、国指定天然記念物「有田のイチョウ」がある。樹齢千年、高さ30㍍、根回りが11㍍を超える大木で、樹木医の方々でも、「単幹のイチョウとしては全国最大級。これより大きいものは知らない」と一様に驚かれる。

この大イチョウを取り巻く景観が、今、大きく変わろうとしている。事の発端は、4年前の2016年5月3日。突如として大枝が落下し、直下のお宅の屋根を貫通したのである。実は、直下のお宅も、国選定の「有田内山伝統的建造物群保存地区」の指定物



大イチョウ直下に建つ伝統的建造物の曳家中の様子

## 曳家で木も文化財も保護

件で、しかも現存する最古級の建物。イチョウを切る、建物を壊す、どちらを取っても文化財の予算で文化財を壊すという矛盾。この全国的にも例がない状況に調整は難航、昨年ようやく事業が動き出した。

枝の落下防止に、枝と枝をロープでつなぐケーブリングを実施し、直径10㍍以上の枝が落下しないようにした。しかし、直下に建物があるままでは大型の重機も入らず、イチョウの管理・保全が十分にできな

いことに変わりはない。そのため、敷地を一部買収させていただき、そこに建つ文化財の建物は曳家で対処することになった。

その曳家の作業とともに、隠れていたイチョウの太い幹が、徐々にその姿を現すようになった。これまで観光客の目に留まることは少なかったが、今後は焼き物だけではない有田の観光スポットの一つとして、これまで以上に注目されるようになればと思う。(有田町教育委員会学芸員・村上伸之)

令和2年3月29日 佐野新由

骨董品という方がなじみ深かそうだが、いわゆる陶磁器の伝世品の鑑定も、テレビ番組の影響などもあり、一般的にもかなりイメージしやすくなったようだ。ただし、コンコンと指ではじくのが決まり事かのように、やたらとたたこうとする方を見掛けるが、ひび割れの有無はともかく、残念ながら何も分からないので無駄である。

発掘調査を業務としていると、出土陶片の鑑別は日常茶飯である。伝世品と陶片では、鑑定の勘どころが多少異なるものの、



完形に近い製品（下）と同種の小片（上）

## 熟練が導き出す“直感”

基本的には同じである。ただし、陶片の場合は全体の一部しか残っておらず、中には小指の先ほどの小片から、器種や器形、文様、生産年代などの識別を要することも珍しくない。

胎土、釉調、文様など、どこで見分けるのか不思議そうに尋ねられることもあるが、実はそんな個別ではなく、もっと総合的に判別しているのである。そう記すと何だか秘技でもありそうだが、実は“直感”が大きい。ただし、その中身が重要で、

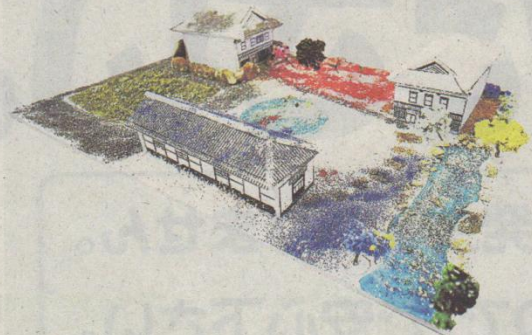
決して当てずっぽうという意味ではない。

一つの製品は、視点を変えると、無数の技術・技法の集合体である。つまり、その無数の要素を、頭の中で瞬時に類例と比較しているのである。それは破片であっても、それがどの形や文様の一部であるか参照することにより、頭の中で完器の姿を描くことも可能である。身もふたもないが、つまり、“直感”が働くようになるまで、ひたすら熟練が必要なのである。（有田町教育委員会学芸員・村上伸之）

令和2年8月10日(月)

コロナ騒動に豪雨、いきなり酷暑かと思えば、もう残暑の季節である。夏のマスク姿にもすっかりなじみ、ここ半年ほどの環境の急変にはあらためて驚かされる。

今年は、学校の夏休みも短かったため、生徒や保護者はもちろん、例年それを待ち構える社会教育関連の組織の方も影響が大きかった。有田町歴史民俗資料館でも、毎年、町内の小学生を対象に二つの企画を準備しているが、多忙な小学生を大人の都合でさらに忙しくさせるわけにもいかず、ど



子どもたちが再現した町並み模型の一つ

## 町並み自由に再現

ちらか一つにという判断に落ち着いた。

結局、実施したのは「町屋模型作り教室」で、断念したのは「歴史の川ざらい〜ベンジャラを探そう」。さすがに炎天下、マスク着用の上、三密を避けて川で陶片探しはあまりにも過酷である。

はや20回目を数える町屋模型作り教室は、今年は8月18、19の両日に開催した。例年、国選定「有田内山伝統的建造物群保存地区」の所在する町の東地区を会場としてきたが、離れた地区の子どもたちにも伝

統的な町並みを知ってもらうため、今年はいくつか西地区の有田町婦人の家で実施した。

保存地区に実在する200分の1の建物の模型を何棟か作り、川や池、トンバイ堀、草木ほかのパーツを組み合わせて、自由に町並みを再現してもらおう趣向である。最初に実際に現地を歩いて町並みを体感したこともあり、最終的に、今年も個性に富んだ、新しい有田の町並みが続々と創造されていた。（有田町歴史民俗資料館長・村上伸之）

(R2.9.7)



ひところの暑さがうそのように、朝夕めっきり冷え込む季節となった。秋分を過ぎ、まさに秋の到来だが、まだまだ木々の葉は深い緑一色。辺り一面が、赤や黄色に染まる秋らしい秋の訪れには、もうしばらくかかりそうである。

むろん、有田の古陶磁にも、こうした季節感を醸し出すあまたの文様を見ることができる。中でも、器面を多彩な植物で彩る草花文の数々は、四季を強く意識した生活

最初期の有田磁器に描かれた菊文と撫子文（左：小溝上窯跡 右：天神森窯跡）



## 古陶磁「秋の草花文」

# 菊が定番、七草は少数派

様式を旨とする日本らしさを象徴する図柄である。

秋の草花では、何と言っても圧倒的に多いのが菊。磁器創始期の17世紀はじめには、すでに写實的、図案的な容姿をあれこれ織り交ぜ、定番文様の一つとなっている。ただ、菊の文様は、花びらが多い花を描けば菊様となるように、季節感の表出以前に、むしろ花の象徴的な意味合いが強い。

ほかには、イチョウやモミジなど、紅葉の季節には欠かせない植物文もそれなりに見掛ける一方で、意外にも「万葉集」にも

詠まれるほど古来から親しまれた萩(はぎ)

・桔梗(ききょう)・葛(くず)・藤袴(ふじばかま)・女郎花(おみなえし)・尾花・撫子(なでしこ)などの「秋の七草」は、古陶磁の文様としては少数派である。

染付の藍一色で判別できるように描くこと自体が難しいためか、一目でそれと分かるススキ(尾花)や桔梗、萩の文様などは見掛けるものの、撫子を描いた文様などはまれにしか目にする事のない超レアな一品である。

(有田町歴史民俗資料館長・村上伸之)